

江戸の面影を訪ねて～江戸三十三観音霊場巡礼記～

発願：令和6年10月31日 ～ 結願：令和7年2月6日



田舎から東京に出てきて60年になるが、江戸情緒が味わえるような東京の街歩きはやったことがない。昼間はモーレツ社員としてビジネス街で働き、夜は裏町の赤提灯の留まり木で上役への文句・御託を並べながら過ごすのが関の山で凡そ史跡や神社仏閣などという場所には縁が無い生活が続けてきた。

書籍では、中世の職人群像を描いた『職人歌合』、商売の有様を記した『江戸あきない図譜』、芸人へのインタビューを聞き書きした『芸人の肖像』（小沢昭一著）、ひいてはお化けや幽霊の『江戸奇談怪談集』などを読んで、かつての江戸や現在の東京になってからでも残っている江戸情緒を一度は味わってみたいと思っていたが、残念ながら今迄にその機会に恵まれなくて馬齢を重ねてしまった。

さて、会社を定年退職してから、前世の悪因、今生で尽くした悪行の限りを少しでも懺悔できるのではないかと、四国八十八ヶ所歩き遍路巡礼や日本百観音霊場巡拝を重ねて、今年令和6年の夏には異教徒邪宗門ではあるがスペインのキリスト教聖地歩き巡礼（カミーノ・フランス人ルート800km）をしてきた。これで累計で約9,000kmの巡礼路を歩いた計算になったが、恥ずかしながら巡拝の験は頭れなかった。マ、信仰心の無い輩には左様な験や功德やご利益を授けて下さるほど神様・仏様は甘くなかったというべきであろう。

さは言いながら、閻魔大王の前に座らせられる迄に累計1万kmの台大に乗る巡礼行脚を終えて多少は覚えを目度くしておきたいと思っているが、体力・精神力共に恍惚の佳境に入っている八十路の老体にはこれは口で言うほど簡単ではない。

言う迄もなく、世界には5大宗教（キリスト教、ユダヤ教、イスラム教、ヒンドゥー教、仏教）があり、イスラム教のメッカ、ユダヤ教のエルサレムなどの聖地巡礼をすれば累計で1万km達成も夢ではないが、これは老体には相当にキツイ修験となろう。仏教の聖地もインドや敦煌などの西域には聖地巡礼の聖蹟があるので行って見たいのは山々であるが、この歳になって砂漠や岩山をラクダの背で行脚するのは馬鹿か気違いの骨頂と馬鹿にされるのがオチであろう。さは言いながら、多少なりとも歩ける内にと来年は海外の何処を狙おうかと密かに秘策を練っている最中である。

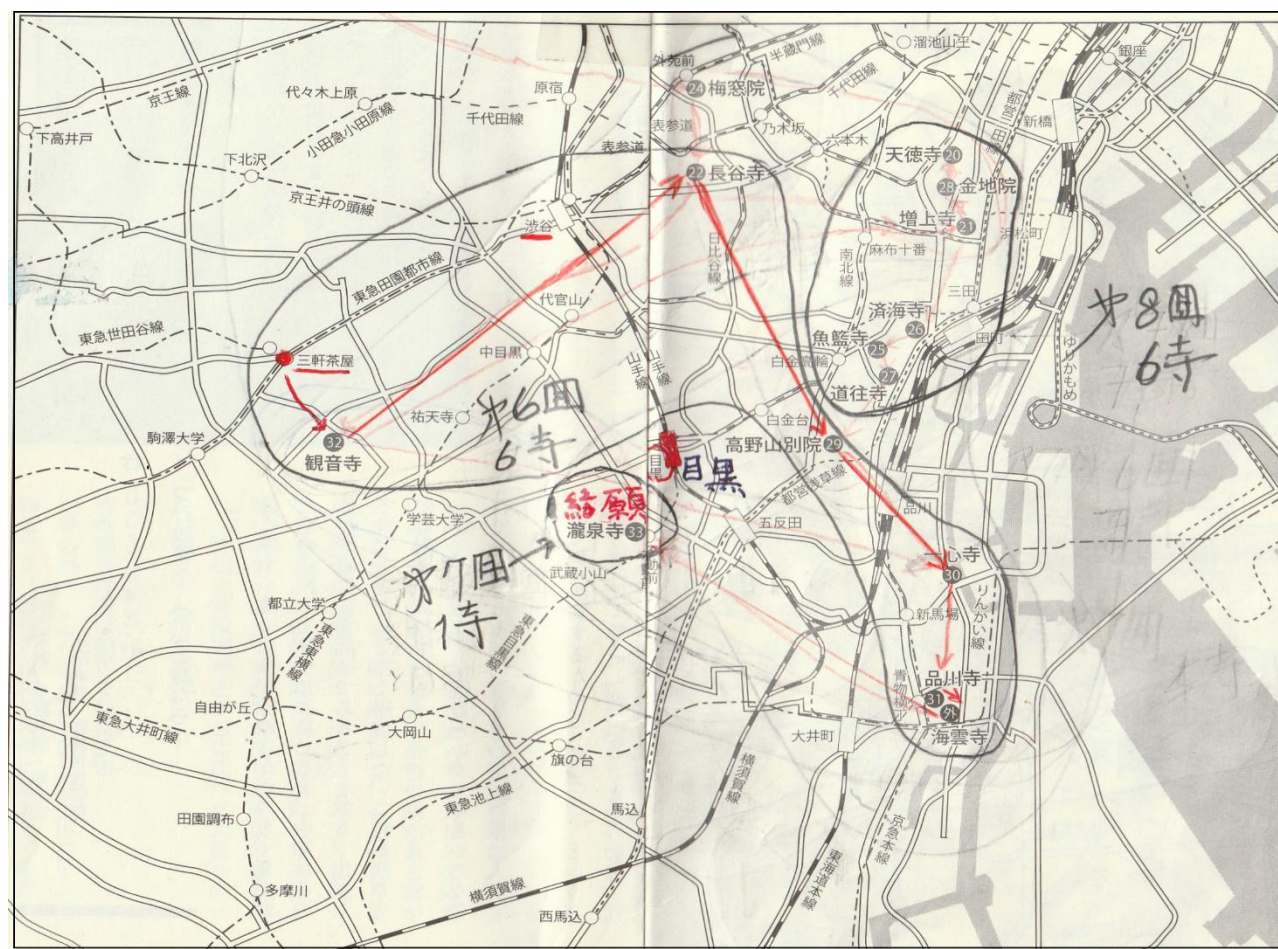
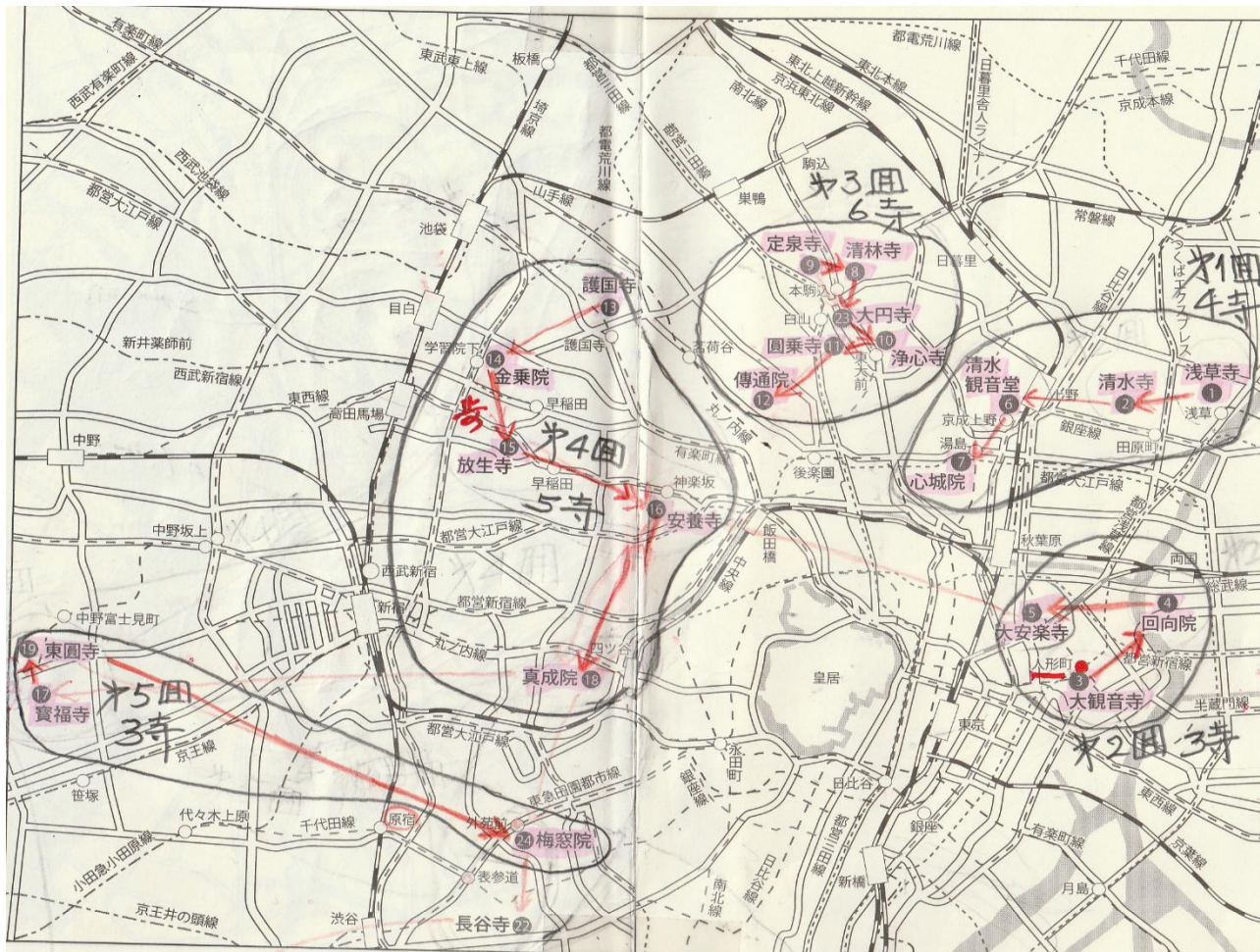
マ、しかしながら、その前に須弥山からのお迎えが来るかも知れず、須弥山迄はウン億由旬（ウン兆km）の道行であるから1万kmなどという地球上の距離は物の数でもない。

それはさておき、大風呂敷は一旦棚に上げて、とりあえずは近場での巡礼を続けることとして、先日は鎌倉33観音霊場巡拝を結願したので、次は江戸33観音霊場を巡礼し、同時に巡拝だけでなく、永年の念願だった巡礼路や裏通りの街角での江戸情緒を味わうこと

とした次第である。江戸 33 観音霊場は二、三の大刹を除けば、その殆どが高層ビルの谷間に閉じ込められたり裏通りの場末に押し込められたような寺院であったが、それはそれでまた江戸情緒が味わえるような場所でもあった。裏長屋から八さん熊さんの濁声が聞こえそうでもあった。参拝後の裏横丁での赤提灯も江戸情緒満点で、結構な直会であった。(江戸が終われば、その次は武蔵野 33 観音霊場巡拝が待っている。ヤレお忙し)

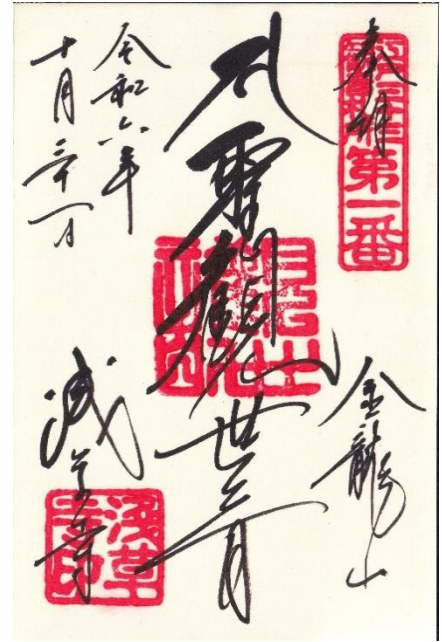
※御朱印に参拝日の記載が無いものは、書置きの御朱印である

番付	山号 寺号	宗派	札所本尊	所在地
1	金龍山 浅草寺	聖観音宗	聖観世音菩薩	台東区浅草
2	江北山 清水寺	天台宗	千手観世音菩薩	台東区松ケ谷
3	大観音寺	聖観音宗	聖観世音菩薩	中央区日本橋
4	諸宗山無縁寺 回向院	浄土宗	馬頭観世音菩薩	墨田区両国
5	新高野山 大安楽寺	真言宗	十一面観世音菩薩	中央区日本橋
6	東叡山 清水観音堂	天台宗	千手観世音菩薩	台東区上野公園
7	柳井堂 心城院	天台宗	十一面観世音菩薩	文京区湯島
8	東梅山 清林寺	浄土宗	聖観世音菩薩	文京区向丘
9	東光山 定泉寺	浄土宗	十一面観世音菩薩	文京区本駒込
10	湯嶋山 浄心寺	浄土宗	十一面観世音菩薩	文京区向丘
11	南縁山 圓乗寺	天台宗	聖観世音菩薩	文京区白山
12	無量山 壽経寺伝通院	浄土宗	無量聖観世音菩薩	文京区小石川
13	神齡山 護国寺	真言宗	如意輪観世音菩薩	文京区大塚
14	神霊山 金乗院	真言宗	聖観世音菩薩	豊島区高田
15	光松山 放生寺	真言宗	聖観世音菩薩	新宿区西早稲田
16	医光山 安養寺	天台宗	十一面観世音菩薩	新宿区神楽坂
17	如意輪山 寶福寺	真言宗	如意輪観世音菩薩	中野区南台
18	金鷄山 真成院	真言宗	潮干十一面観世音菩薩	新宿区若葉
19	医王山 東圓寺	真言宗	聖観世音菩薩	杉並区和田
20	光明山 天徳寺	浄土宗	聖観世音菩薩	港区虎ノ門
21	三縁山 増上寺	浄土宗	西向聖観世音菩薩	港区芝公園
22	補陀山 長谷寺	曹洞宗	十一面観世音菩薩	港区西麻布
23	金龍山 大圓寺	曹洞宗	聖観世音菩薩	文京区向丘
24	長青山宝樹寺 梅窓院	浄土宗	泰平観世音菩薩	港区南青山
25	三田山 魚藍寺	浄土宗	魚藍観世音菩薩	港区三田
26	周光山 済海寺	浄土宗	亀塚正観世音菩薩	港区三田
27	来迎山 道往寺	浄土宗	聖観世音菩薩	港区高輪
28	勝林山 金地院	臨済宗	聖観世音菩薩	港区芝公園
29	高野山 東京別院	真言宗	聖観世音菩薩	港区高輪
30	丰盛山 一心寺	真言宗	聖観世音菩薩	品川区北品川
31	海照山 品川寺	真言宗	水月観世音菩薩	品川区南品川
32	世田谷山 観音寺	単立	聖観世音菩薩	世田谷区下馬
33	泰叡山 瀧泉寺	天台宗	聖観世音菩薩	目黒区下目黒
番外	龍吟山 海雲寺	曹洞宗	十一面観世音菩薩	品川区南品川



(引用原図：新妻久郎著「江戸三十三所巡礼」朱鷺書房より引用)

【第1番】金龍山 浅草寺



浅草寺は言わずと知れた浅草の観音様であり、坂東33観音霊場唯一の都内の札所でもある。昔は江戸の旦那衆やおらが寺の近在の庶民で賑わったらしいが、今ではお上り観光客や修学旅行生、特にインバウンドの外人観光客で押すな押すなの大盛況である。

浅草は昔から江戸随一の盛り場で、特に芝居小屋で鳴らした浅草六区（ロック）や仲見世が江戸の華であったらしいが、今では浅草六区の一部が辛うじて往時の芝居小屋の風情を残しているだけで、仲見世も門前町もインバウンドの外人観光客向けの安物の土産物屋や外食屋が雑然と並び、派手な貸し浴衣を着たアジア系外人女性や連れの男などで立錫の余地も無いほど混雑していて、江戸情緒と呼べるような風情は全く無かった。



（インバウンド観光客で大混雑の仲見世）



（浅草六区の辺りには若干の旧浅草の面影が残っていた）

ただ、若い頃に何回か行った日本初のバー「神谷バー」（当時一杯 60 円也のデンキブランが名物）は健在で懐かしかったが周辺は雑多な雑居ビルのネオン街になっていた。



（左：半世紀前の神谷バー、右：現在の神谷バー周辺）

どこかに江戸情緒の雰囲気が残っていないかと観音様の裏道りに入ってみたが、合羽橋通りの裏通りに若干の雰囲気が残っているだけで、ゴチャゴチャとした裏道は“何処も同じ秋の夕暮れ”であった。（参拝日：令和 6 年 10 月 31 日）

【第 2 番】江北山 清水寺（せいすいじ）



何とも愛想無い札所であった。ビルに囲まれた鉄筋コンクリート造りの小さなお寺で、本堂も閉扉されていて、取りつくシマも無かった。般若心経を読誦する気持ちも起こらず、ダンボールの小箱の中に入っていた皺の寄った古びた書置き御朱印（500 円也）を頂戴して早々に退散し、近くの道具屋が店を並べる「かっぱ橋道具街」をぶらついてみた。

調理器具や食器などを商う店が多く、昔の庶民の市場の風情が残っていた。なぜか客は殆どが外国人のようだった。浅草から流れて来た外人観光客であろうか。



(昭和 30 年頃のかっぱ橋道具街)



(今の道具街。大衆的な昔の面影が残っていた)

道具街から合羽橋通りを西に 5 分ほど上野方面に歩くと左衛門橋通りに突き当たるが、その交差点に蕎麦屋があったので昼飯にした。10 人くらいで満席になるような狭い店であったが大将の包丁さばきは抜群でこれぞ料理人と思わせるものだった。応対も丁寧で気持ち良い店だった。お値段も大衆向き。昼飯なのに、つついとお神酒が進んだ。店名は忘れたが、お近くに行かれた折には是非お立ち寄りを。(参拝日：令和 6 年 10 月 31 日)

【第 3 番】大観音寺（おおがんのんじ）

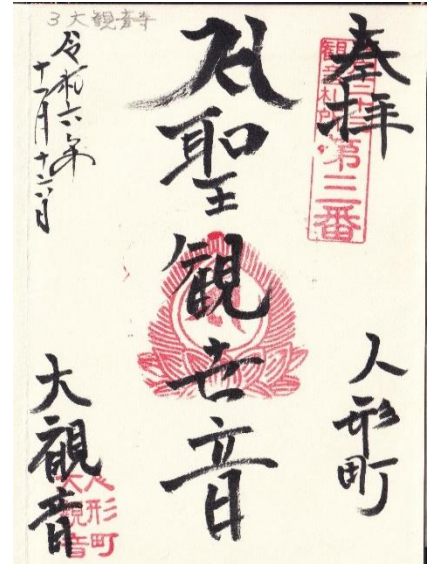
江戸観音霊場三十三寺（番外 1 寺を加えて 34 寺）は東京都 11 区内に分散しているが、大体は同じ区内や隣接する区内では数寺が徒歩で巡るのに程よい間隔で繋がったブロック内にある場合が多いので、一回（一日）当たり 2 ブロック（平均で約 5 寺程度）を巡拝すれば合計 7 回くらいで結願できる勘定になる。

発願第 1 回目の前回は 1 番・浅草寺からすぐ隣の第 2 番・清水寺、そこから歩いて上野公園の第 6 番・清水観音堂、湯島の心城院までの 4 寺を歩いた。歩数計の記録は 17,000 歩、歩行距離に換算すれば 10km 位であるから八十路を越えた老体には丁度手頃な散策距離であろうが、慣れない街中を寺を探しながらウロウロと歩くのは田舎住まいの老人には些か堪えた。

今回の第 2 回目は、中央区日本橋人形町の第 3 番・大観音寺から始めて同じく日本橋小伝馬町・大安楽寺や墨田区両国・回向院等の下町の“おらが寺” 3 寺を巡った後、場所を明治時代から文教や文士の町として名高かった文京区に移して八百屋お七の物語で知られている第 11 番・圓乗寺などの 6 寺、合計で 9 寺を巡礼する予定で出掛けたが、日本橋や両国などは生まれて初めて足を踏み入れた土地であり、また門前駅の地下鉄・東京メトロ

の駅は今までに乗り降りしたことが無い駅であったから駅のホームから地上に出て寺の参道に辿り着く前に草臥れ切って、最初の3ヶ寺を廻り終えた時には既に夕暮れが迫っていて、残念ながらこの日はこの3ヶ寺の巡拝だけで諦めて文京区の6ヶ寺は後日に廻すことにした。

さて、前置きはこのくらいにして大観音寺に戻ろう。



大観音寺は日本橋人形町にある。江戸城が築かれた頃は、その東側には広大な湿地帯（江戸湾の入り江）が広がっていて、家康はここを干拓して城下町としたので商人、職人、人足などが大勢移り住み、今の人形町辺りは歌舞伎、芝居、人形浄瑠璃、見世物、曲芸などの小屋や遊郭（吉原遊郭）が軒を並べ正に「江戸の華」と謳われた下町の遊里であったそうだ。因みに人形町という町名は、此处に遊んだ旦那衆が土産に買って行く人形が大繁盛して人形師が大勢住んでいたことに拠るらしい。

大観音寺もビル群に囲まれた小さな伽藍の寺であったが、ご近所の爺さん婆さんが散歩や買い物の序に普段着で拝んでいくような“おらが寺”の風情があった。

一方、ここの札所本尊の縁起は古く鎌倉時代迄遡るそうだ。京都の清水寺に帰依していた北条政子は鎌倉の地にも新清水寺（しんせいすいじ、浄光明寺の近くにあったそうだが今は無い）を創建し、鉄造の聖観音を本尊として祀ったが、後の大火で寺は全焼し、また、明治時代の廃仏毀釈などの影響を受けてこの聖観音は鎌倉由比ガ浜に打ち捨てられそうになった折、人形町住人の檀家によって拾われて人形町に勧請され、これを祀る為に建てられたのがこの大観音寺だそう。

この本尊は仏頭だけの聖観世音菩薩であるが、仏頭の高さは1.7メートルもあり、仮に全身があれば8メートルの巨大仏となる（鎌倉の大仏さんの頭部の大きさ2.3メートルと比べても大きな頭部仏像であることが分かります）

本尊は毎月2日間（11日と17日）しか開帳されないということで、今回は折悪しく開帳日の前日であったので、本尊の厨子は閉扉されていてお前立しか拝めなかった。



（慎重しやかな内陣。本尊は奥の厨子の中に安奉）

ところで、このお寺の宗派は「聖観音宗」というが、これはちょっと聞き慣れない宗派である。元々は天台宗に属していた浅草寺（浅草観音）が独立して創った宗派で所属20寺程の小さな宗派であるようだ。

さて、お寺の脇の小さな路地には昔の置屋が昔ながらそのままの格好で残っていた。今は高級料亭になっているのかもしれない。

参拝した後に、近くの路地の二、三本を歩いてみたが、下町の遊里の逝きし世の面影を留めた建物が幾つか残っていた。

（参拝日：令和6年11月16日）

（遊里の面影を残す路地裏⇒）



【第4番】回向院

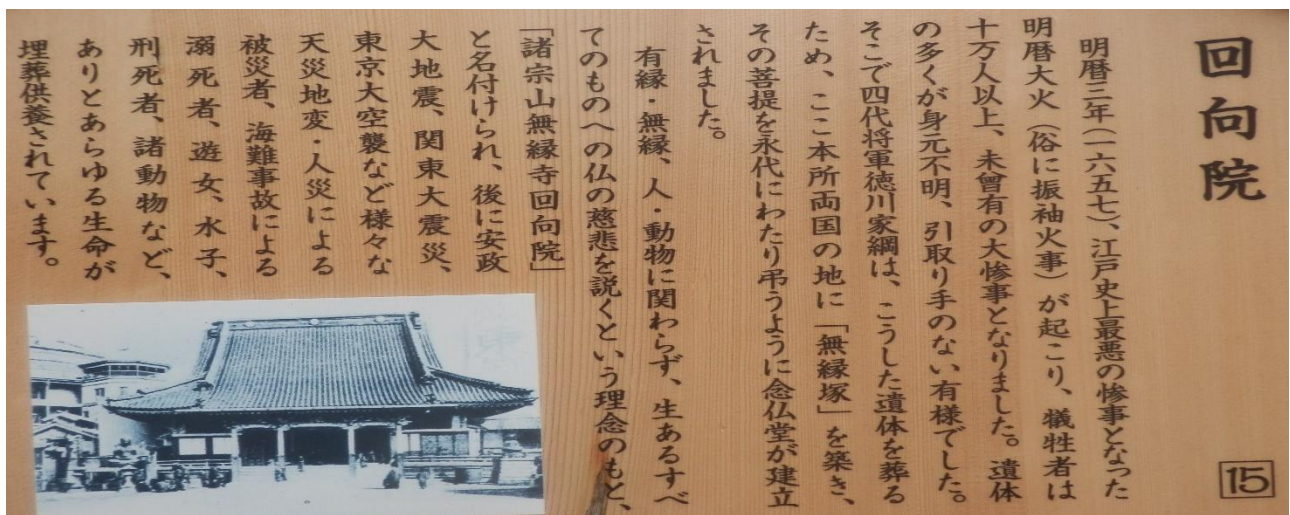


（回向院山門）



（回向院本堂）

回向院は相撲で名高い両国にある。山門、本堂とも超モダンなデザインの伽藍であるが、周囲の高層ビル街の景観に馴染んでいるのか左程の違和感は感じなかった。ビルの谷間に囲まれているにしては随分広い境内であった。この寺の縁起は下記の立札のとおり。



この大火で亡くなって葬られた人々は身元や身寄りも分からず、また宗派も種々雑多であっただろうが、将軍家綱はこれらの無縁仏を差別せず手厚く葬るようにと命じたので、この回向院は山号を諸宗山、寺号を無縁寺、院号を回向院と称する。

境内の一面には前頁の立札にも書かれているように、大火、天変地異、人災、海難事故などの犠牲者達を弔う為の古い供養塔が沢山建立されていた。刻字は消えかかっているが、供養碑を眺めていると往時の様子が偲ばれた。以下はその一部である。



(↑ 供養塔群) (明暦大火供養塔⇒)



(牢病死者供養塔)



(大黒屋光太夫船遭難供養塔)



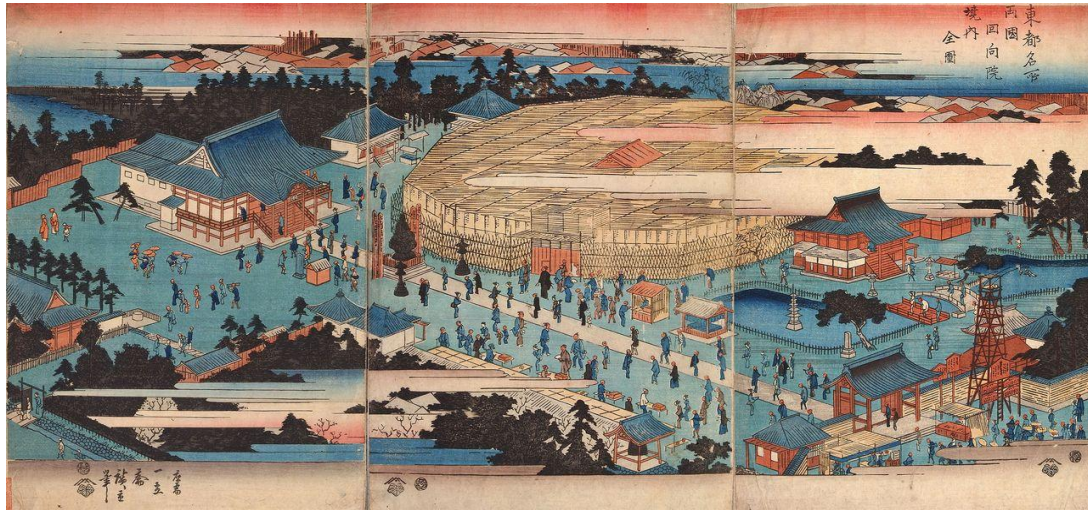
(鼠小僧次郎吉の墓)

札所本尊は馬頭観世音菩薩である。馬頭観音を本尊としている寺は非常に少なく、江戸三十三観音札所ではこの回向院1寺だけであり、日本百観音霊場100札所に広げてみても丹後舞鶴の1寺と秩父の1寺の合計2寺しかない。馬頭観音は普通は憤怒の面貌で刻まれているが、ここの馬頭観音は牛馬犬猫小鳥などの動物の供養の役目もしているので馬頭観音には珍しい優しい温顔であった(右写真)。

境内には力塚という石碑もあった。亡くなった相撲取りの霊を祀り、また相撲取りの成長を願う為の碑だそう。聞けば、相撲の興行は国技館が出来るまではこの回向院の境内で



行われるのが常だったそうで、そのためにこの門前町には相撲部屋やちゃんこ鍋屋が多いらしい。両国という地名は相撲と一心同体の響きがあるが、実は、元々はこの両国の回向院が相撲興業の発祥の地であり、その縁で国技館が両国に誘致されたという訳である。



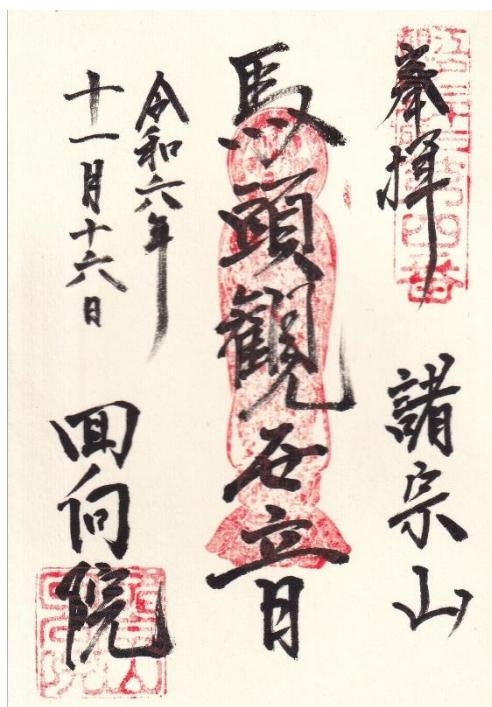
(相撲興業中の回向院境内の様子。安藤広重筆「東都名所 両国 回向院 境内全図」)



(力塚碑)

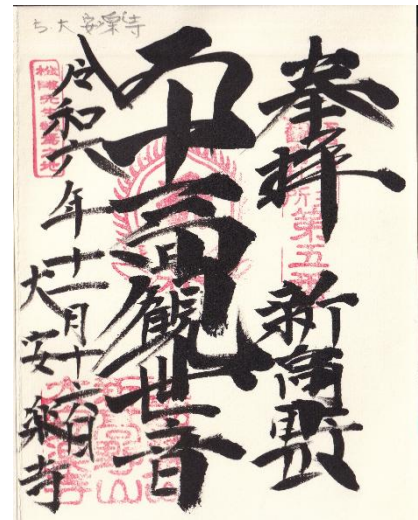


(門前町に並んでいた力士モニュメントの一つ)



(参拝日：令和6年11月16日)

【第5番】大安楽寺



この寺も、マンション・ビルの谷間に閉じ込められたような狭い境内に、唐破風の向拝が無ければ普通のビルと間違えるような鉄筋コンクリートの本堂が建っていて、寺の伽藍としてはやや違和感が感じられた。境内と言うほどの敷地も無く、本堂以外に参拝する伽藍も無かったが、その本堂も閉扉されていてご本尊も拝めなかったので、気が抜けた参拝であった。

さて、江戸時代に300年間に亘ってこの地に江戸幕府の伝馬町牢屋敷・処刑場があり、その規模は3,000坪という巨大な牢獄で、牢獄があった300年間に投獄された者は数十万人、死刑された人は1万人以上と言われている。

投獄された人々の中には、安政の大獄で投獄・斬首された吉田松陰、橋本佐内や言論弾圧の蛮社の獄で投獄された高野長英、渡辺崋山、平賀源内などが居る。

この寺は、ここで処刑された人々の霊を慰めるために大倉財閥を築いた大倉喜八郎、安田財閥を築いた安田善次郎の二人が土地を寄進し、また勧進を進めて建てた寺である。



(境内にあった傳馬町牢御塚跡、処刑場跡の碑)

寺のすぐ前は小さな公園（十思公園）になっていて、その端に吉田松陰の辞世の句碑や供養碑があった（右写真）。

ここが松陰終焉の地で、碑に刻まれた辞世の句の文字は苔蒸しっていて読めなかったが、

身はたとひ 武蔵の野辺に朽ちぬとも
留め置かまし大和魂

という句であるそうだ。

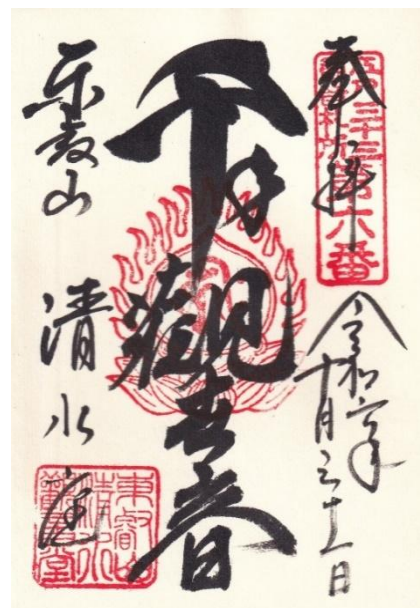


寺のすぐ向いには「小伝馬町牢屋敷展示館」があり、往時の牢獄の様子が再現されていた（下写真）。牢内は旗本用の揚げ座敷、御家人・藩士・僧侶用の揚げ屋、百姓牢、女牢などに分かれていたが、大半は窓もない牢獄が並び衛生状態も極悪だったと言われている



（参拝日：令和6年11月16日）

【第6番】清水観音堂（きよみずかんのんどう）

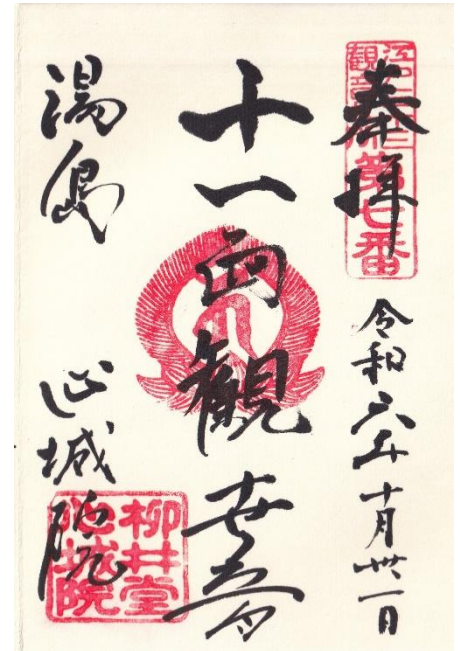


この寺は上野公園にある。江戸城の鎮護の為にその鬼門に当たる上野に寛永寺（天台宗）が開かれたが、同じ宗派の天台宗総本山の比叡山延暦寺が平安京を鎮護する為の鬼門寺として創建されたのに倣って、寛永寺も比叡山や京都の有名寺院になぞらえた堂宇を次々と建立した。この清水観音堂も本家の京都の清水寺に見立てた堂宇で、清水寺と同じ舞台造りになっている。また、本尊も同寺から千手観世音菩薩像が勧請されている（秘仏）。因みに寛永寺も清水観音堂も山号は東叡山であるが、この山号も西の比叡山に由来したものである。

さて。上野公園には東京国立博物館や国立科学博物館には時々行くが、不忍の池付近には滅多に行く用事が無いので、今日は次の札所である湯島の心城院へ行きがてら不忍ノ池

の弁天堂に渡り、弁天堂を参拝して対岸に渡った。不忍ノ池には一面の蓮が茂っていて蓮の花が開く頃は壮観な眺めだろうと思われた。極楽、極楽。(参拝日：令和6年10月31日)

【第7番】心城院



上野の不忍ノ池を出てから湯島天神の方向へ10分間も歩けば湯島天神に至る。この札所は湯島天神・男坂の石段のすぐ下のビル群に囲まれた街中の小刹であるが、江戸観音霊場札所に多いコンクリート造りの堂宇ではない瓦屋根の伽藍が心安らぐ佇まいであった。

心城院は元来は湯島天神の一堂宇であって如何にもご近所の檀家の爺さん婆さんが朝晩の散歩の序の参拝を欠かさないといった風情で、下町の落ち着いた雰囲気があった。御朱印を押して下さった住職の奥さん(?)も丁寧な観音菩薩のような方だった。

この寺には、観音霊場のご本尊(十一面観世音菩薩)とは別に、当山のご本尊として歓喜天が祀られているので、昔から「湯島の聖天さま」として庶民に親しまれてきた。歓喜天は象の頭をした男女佛が抱き合っている仏様で家内安全、厄除、商売繁盛、子孫繁盛、それにも増して夫婦和合の神仏である。

ご尊顔を拝したかったが、厨子の中に安置された絶対秘仏なので拝めなかった。この種の歓喜双身天は日本では人前に姿を現さない秘仏になっていることが多いが、お生まれになったインドやネパールでは、道端で堂々と抱き合っていて、通行する人々も極く普通に触ったり、撫でたり、赤い顔料を塗ったり、線香を上げたりしている。マ、これもお国柄や宗教受容の仕方の違いではなかろうか。涅槃の境地に入るには肉体の愉悦が欠かせないと説くカーマスートラを聖典とする世界に住む人々が羨ましい限りナリ。

(参拝日：令和6年10月31日)

【第8番】清林寺

第3回目の今回は、文京区内の6札所を巡った。前回第2回目の日本橋や両国での3札所の巡拝は最寄り地下鉄駅への乗り換えに手間取って草臥れ果てたことに加えて、地下鉄駅の出口や札所への道順も分からず往生したが、今回は札所が徒歩圏内に繋がっていたので、次の札所までブラブラと歩いてノンビリと辿ることが出来た。

さて、第8番札所の清林寺。街中にあっても近辺には高層ビルもなく、下町に多い高層ビルの谷底に建っているような鉄筋コンクリートの狭い寺ではなく、落ち着いた街並みの中に溶け込んだ静かな伽藍であった。小利ながら落ち着いた雰囲気漂っていた。



この寺の札所ご本尊は本堂に祀られた阿弥陀如来の脇侍の聖観世音菩薩であるが、両者とも秘仏として開帳されていないので、替わりに書院の軒下に設えられた小さな御堂に札所の本尊として別

な聖観世音菩薩が祀られていた（上右側写真）。上の写真では光って見えないが立札には「江戸札所 観音さま」と書かれていて、如何にも観音巡りの庶民がいつでも気軽に詣れるように設えてあった。本堂内陣の奥の豪華な厨子の奥に厳かに祀られている仏像よりも外に向けてオープンになっているこちらの観音様の方が本来の姿ではあるまいか。

さて、境内の隅では木造三重ノ塔が建築工事中であった。昭和52（1977）年から半世紀近くに亘って工事が続けられているそうであるが完成期日は未定だそう。奈良・斑鳩の法輪寺の三重塔を参考に当時の飛鳥様式の伝統技術だけを使って建築中だそうだが、完成すれば関東では初めての飛鳥様式の木造の塔となるそう。鉄筋コンクリート製の御堂が多い寺社建築の中で、このような木造寺院建築の伝統技術を後世に残す試みは貴重であろう。完成した三重塔には奉納した写経が納められるそうだから私が本日納めた般若心経の写経も納められるだろうから、落慶法要には参拝したいと思うが、その折には西方から戻るしかないだろう。

また、この寺は般若心経の英訳・露訳・仏訳・古代希臘語訳版も出版しているようで誠に結構なことである。



（参拝日：令和6年11月19日）

【第9番】定泉寺

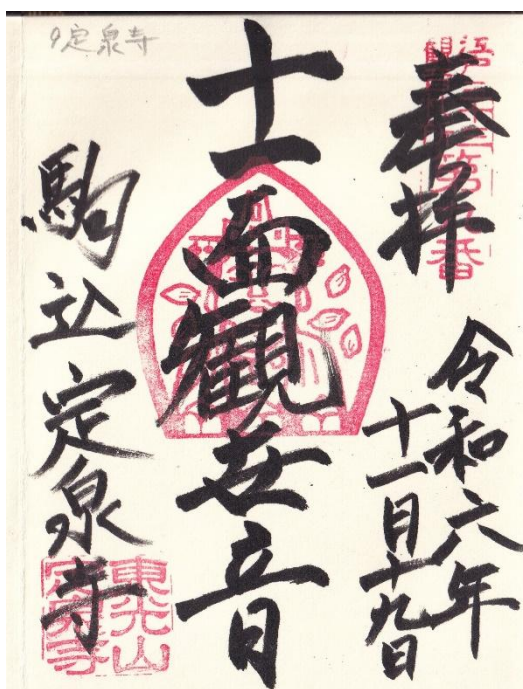


(大きな光背を背にした札所本尊)

この寺は地下鉄「本駒込駅」を出てすぐの道路脇にあった。交通が輻輳している広い本郷通りに面しているにも関わらず伽藍は山門から奥に引っ込んでいて静かな佇まいであった。本堂は閉扉されていたが、御朱印を頂いた事務所から本堂内陣に上がらせて貰えたので、札所本尊・十一面観世音菩薩を拝むことができた。

境内には六面の宝篋印塔があり、それぞれの面に阿弥陀仏が浮き彫りされている珍しい宝篋印塔であった。また、その横の植え込みの一隅にはユーモアたっぷりの布袋尊が笑っておられた。(参拝日：令和6年11月

19日)



【第10番】浄心寺



(浄心寺：入口左に大きな緋・白塗りの布袋尊が見える)



(本堂)

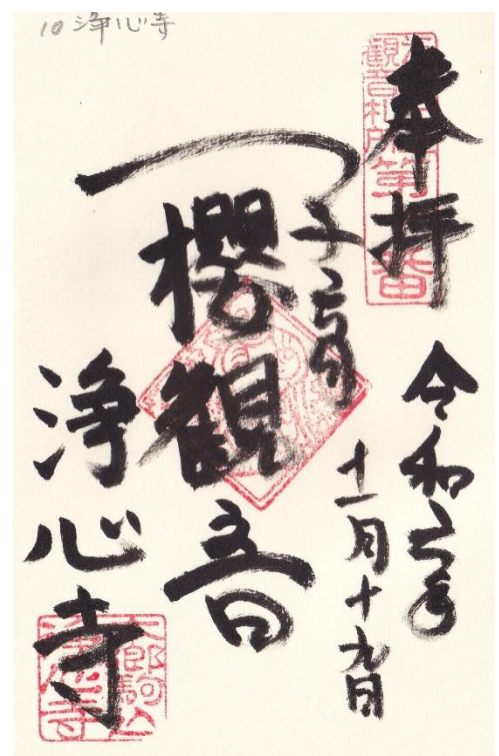
文京区には寺院が多い。江戸観音霊場で見ても33札所の内、その1/3に当たる9札所は文京区にある。いずれも江戸時代に建立された寺で、明暦の大火後に江戸の中心地からこの郊外の地に移転して来た寺が多い。宗派で言えば、その半分以上が浄土宗である。また、世に言う大利、名利ではなく、近在の庶民が毎日の用達の序に拝んで行くような“おらが寺”の雰囲気の小刹が多いようだ。

さて、この浄心寺もそのような本郷通りの街並の中に建っていたが、この寺は本堂も大きく、広い境内の中には大きなセレモニーホールや霊園なども作られていて多角経営のビジネス寺院とお見受けした。昭和時代の中頃には境内の一面でガソリンスタンドの営業を始めたそうで、寺院が経営するガソリンスタンドは全国でこれが第一号だったと当時のNHKで報道されたらしい。

門前入口には白色と緋色に塗り分けられたコンクリート製極彩色の巨大な布袋が建ち、本堂前には「この鐘は中曽根康弘さまより頂いたもの、ご希望の方は一つ鳴らして下さい」と書かれた立札の横に小さな梵鐘が吊り下げられていた。お言葉に甘えて一つ撞いてみたが、小生の日頃の行いが悪いのか澄んだ音色はしなかった（昭和疑獄最大の黒幕国賊が納めた鐘が澄んだ音色で鳴る訳もないと思われるが・・・）。

そのような訳で、このセレブ風なカラフル札所はチョイト拙僧の好みではなかったもので、早々に退散した。札所ご本尊である大きな十二面観世音菩薩や寺本来のご本尊阿弥陀如来など多くの仏像が祀られている本堂は閉扉されていて拝謁できなかった。

(参拝日：令和6年11月19日)



【第11番】圓乗寺



一つ前の札所、第10番・浄心寺から本郷通りを渡って坂道を下って行くと、如何にも昔の江戸の住民や旅人が通ったであろうような雰囲気のある坂道の一画があった。浄心坂とも於七坂とも呼ばれているらしい。於七坂という呼称は後に触れる“八百屋お七”に由来しているようだ。坂道を下った所は白山通りで高層マンションなどが並んでいてとても寺などがあるようには思えない街並みであったが、ひょいと横道に入ると30階建て以上の高層マンション群の谷底に何かモダンな会館風のガラス張りの白亜の建物があり、これが天台宗圓乗寺であった（上左側写真）。外見では寺院とも思えないモダンな建物で、観音霊場札所の本尊はロビーの突き当りの小さな祭壇に祀られていた（右側写真、許可を得て撮影）。

建物の内部は整然としていて、一流ホテルのロビーのような受付があり、通りがかりの大衆がちょっと本堂に上がって拝んで行くというような雰囲気ではなく、檀家やセレブ以外の参拝者は身の置き所も無しといった雰囲気であった。

しかし、よく注意しないと見落とすような境内の奥の端には“八百屋お七の墓”とお七地蔵が祀られていた。ご存じのとおり、八百屋お七の伝承は下記のような伝説である。

今を去ること350年程前の江戸時代初期の頃、本郷森川宿の八百屋に器量良しの娘が居た。名を於七（お七）と言う。ところが、天和の大火によってお七の家も焼け出され、お七は親とともに近くの菩提寺であるこの圓乗寺に避難した。

寺での避難生活中にお七は寺の小姓と恋仲となったが、やがて店が建て直され、お七一家は寺を引き払ったが、お七はその小姓への想いが募るばかりで、もう一度自宅が燃えれば再び菩提寺で暮らすことができると考えて自宅に放火した。火はボヤで消し止められたが、お七は放火の罪で逮捕され、千住小塚ケ原の刑場で火炙りの刑で露と消えた、放火は当時でも極刑であったが、女の火炙りの刑は当時でも滅多に無いことだったそうだ。

処刑の直前、死出の旅のはなむけに遅れ桜の花一枝を持たされたお七は次の辞世の句を詠んだと伝えられている。何とも痛ましいことである。

世の哀れ 春吹く風に 名を残し 遅れさくらの けふ散りし身は

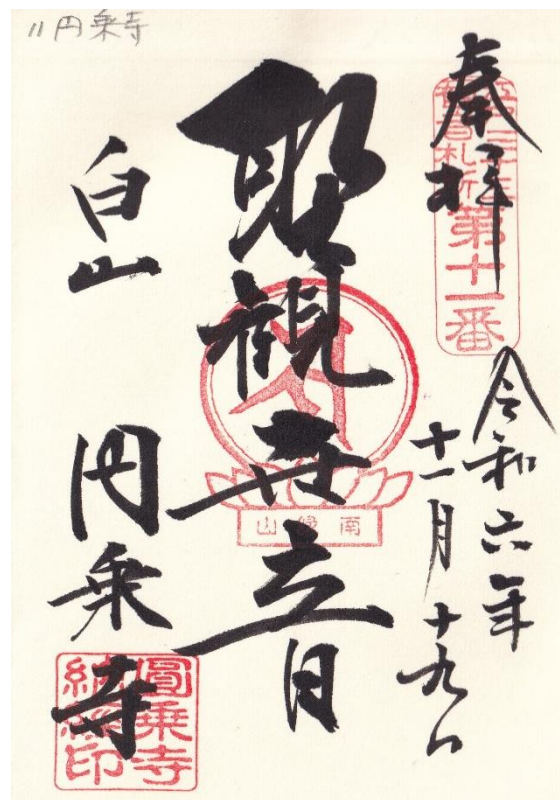
この事件は純情可憐なお七への庶民の同情・哀憐を呼び、汚れの無いお七の瞳を見て哀れを誘われた町奉行も何とか死罪から逃れさせようと「お七、そちは未だ14才だな、左様だな」と何回も繰り返したが、お七は聞かれるたびに「私は17才です」と正直に答えたという。14才以下なら死罪から免れることが出来たからである。

この事件は世間に大きな波紋を呼び、井原西鶴が「好色五人女」に書き、それが歌舞伎、浄瑠璃、舞踊、芝居や小唄で演じられて持て囃され、有名になった。

この圓乗寺に祀られているお七地蔵はお七役を演じた江戸後期の歌舞伎役者の岩井半四郎が寄進した地蔵で、現在に至るも良縁成就、家内安全、厄除、火伏などの祈願に大勢の人々がお参りしているようだ。なお、お七に関する事跡はこの寺のすぐ近くの第23番札所「大圓寺」にもある（P. 35 参照）（参拝日：令和6年11月19日）



（圓乗寺境内 八百屋於七の墓と於七地蔵）



【第12番】伝通院



文京区小石川にある大きな寺であった。地下鉄「春日駅」を出て暫く歩くと道は登り坂になり、前方に大きな丘陵地が横たわっていた。結構な勾配の坂道で登りきるまでに息が切れて何回も立休みをしなければならなかったが、登り切った丘陵地の天辺にこの寺があった。『江戸名所図会「小石川傳通院」』（下図）を見ると、この丘陵地の全域に寺院の境内や伽藍が描かれていたので、かつては巨大な寺院であったのであろう。今でもこの辺りには伝通院の末寺と思われる多くの寺が残っていた。



伝通院は徳川家康の生母・於大の方の菩提寺であり、代々徳川家の庇護受けて大伽藍が整備されて大刹となったが、明治維新の廃仏毀釈や徳川家没落によって衰退した。

伝通院という院号はこの於大の方の法名を採ったもので、寺号は寿経寺である。

札所本尊は無量聖観世音菩薩で、六尺余の細身の優しい顔の美しい立像であったが、本堂外陣の隅にひっそりと祀られているのはちょっと失礼なことではなかろうか（右写真）。

帰りは、来た道とは別の春日通りを下って地下鉄後樂園駅から帰宅した。

（参拝日：令和6年11月19日）



【第13番】護国寺

現在の江戸観音霊場 33 寺の所在地を J R 山手線の内外で大雑把に分けると、その 2/3 を占める 22 寺は山手線内部（続に謂う「山の手」地域、旧江戸の範囲）にあり、残りの 1/3 の 11 寺は当時は江戸の辺地、即ち湿地帯の下町だった台東区、墨田区、品川区や農村部であった中野区、杉並区等に分布している。

江戸幕府を開いた家康は、好立地の高台には武家屋敷や諸国大名の江戸屋敷を置き、江戸城の東側の湿地帯（江戸湾）を干拓して商工業の下町として町民を住まわせ、また、西側は農地として農民を住まわせた。この武家屋敷や江戸屋敷があった場所が現在の山手線環内であろう。

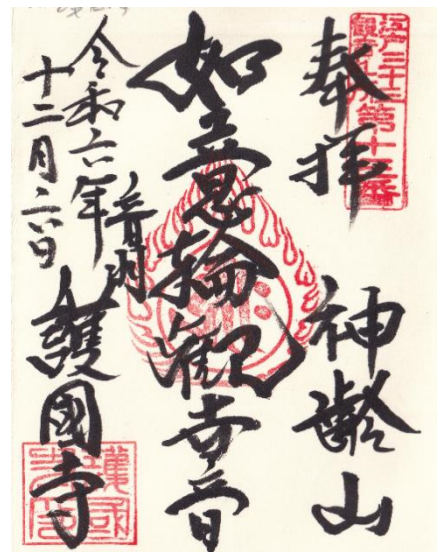
さて、同じ山手線環内でも、その東部の上野や文京区にある 8 寺は前回で廻っているので、今回は西部の新宿付近にある 5 寺を詣でた。前回の前者は次の札所までの距離が短くて徒歩で廻れたが、今回は寺間の距離が長く、次の寺までは地下鉄乗換で行かねばならずおまけに最寄りの地下鉄駅から寺までの徒歩距離も結構長い寺が多くて草臥れた。

因みに、今回の 5 寺巡礼の徒歩の総歩数は 2 万 3 千歩（約 14km）となったが、この歩数の内、駅での乗り換えやホーム歩きや階段歩きの部分が 1/3～1/2 を占めているのではなかろうか。

さて、今回は第 13 番札所「護国寺」（文京区音羽）から始めて第 18 番「真成院」（新宿区四谷）までの 5 札所を巡った。（一寺だけ離れている第 17 番「寶福寺」（中野区）は日没で今回は巡れなかった）。まずは護国寺から始めよう。



（堂々とした本堂（観音堂））



護国寺は街中ではあるが、皇族の墓地・豊島岡御陵に隣接した広大な大刹であった。境内の広さはかつては 5 万坪、狭くなった今でも 1 万坪あるそう（差の 4 万坪は皇族の墓地新設に献上したのかも・・・）。広大な境内には参詣者もほとんど居ず、本堂、月光殿、多宝塔、薬師堂、大師堂、仁王門、不老門、惣門などがゆったりと配置されていて静謐なものだった。また街中の騒音から逃れた一帯の高台からは下界の眺めも良かった。

この寺は徳川五代将軍綱吉の生母桂昌院の発願寺であるから徳川幕府との縁が深く、そのためにその方面からの多額の寄進で維持されていると思われる大刹・真言宗豊山派大本山であり、我ら檀家庶民が毎日下駄履きでお詣りするような「俺が寺」の雰囲気は無かつ

た。襟を正して参詣しなければならないような風情であつが、たまには斯様な格式のあり
そんな寺院に真面目に参詣して修業・菩提を積むのも一策であろう。



(八脚仁王門、背室には増長天と多聞天)



(不老門)

さて、この寺は京都町家の八百屋の娘（お玉）から出世して徳川将軍江戸城の大奥の階段を昇り詰めて家光の側室となった桂昌院の発願寺であること、そのため幕府の庇護を受けて大発展したことは冒頭で述べた。桂昌院は幕府の中でも相当の力を持っていた大奥であつたらしく、全国の多くの寺院にもその寄進の足跡が記されているが、特に京都西山の名刹・善峯寺（西国観音霊場札所第20番）は桂昌院の多大な寄進で建立されたそうで、見るからに豪華な寺院である。

私は半世紀程前にこの善峯寺のある京都西山の麓に住んでいたことがあって、子供を連れて散歩がてらによく行ったことがあったが、この寺を訪れた文人墨客（例えば杉本苑子や白洲正子）の巡拝記では、余りにも整った豪華な伽藍や箱庭風の庭園は如何にも成り上がり者の寄進によって建てられた貴族趣味の大寺で仏道の趣に欠けると酷評されていたのを覚えている。

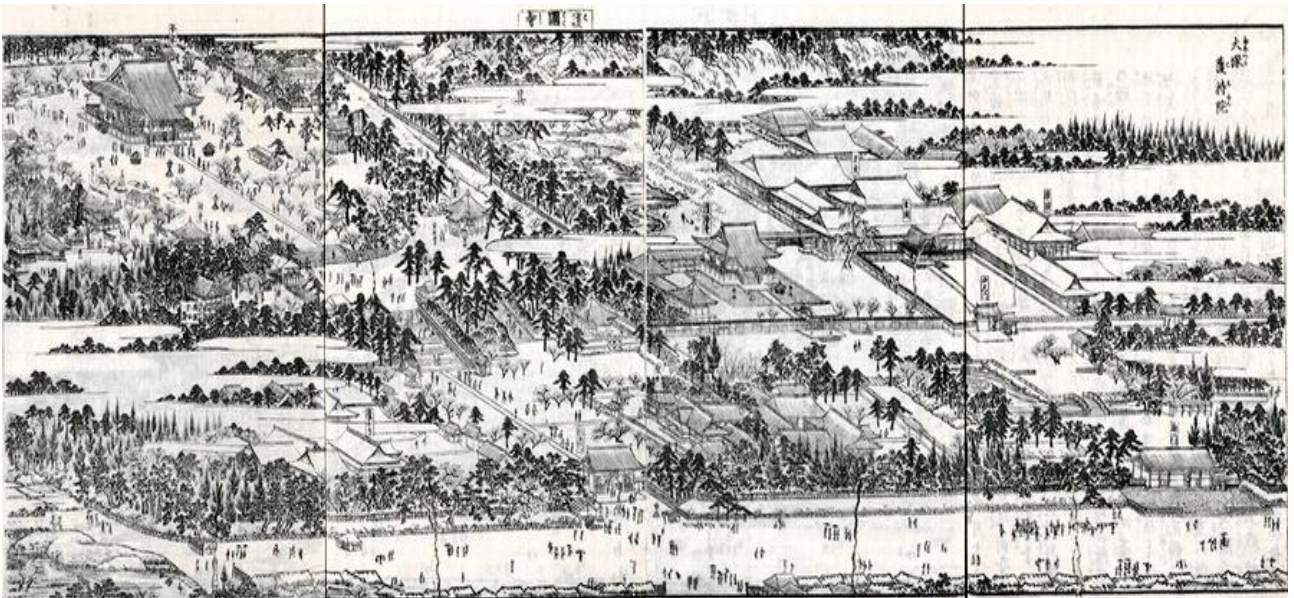
確かに、この善峯寺の名物になっている珍木に桂昌院お手植えの遊竜松という五葉松があり、この松は樹高僅か2mの幹でありながら枝を50mも地上に這わされている畸形の巨大な盆栽であるが、見ていて美しい枝ぶりなどと言う物ではなく、気持ちが悪くなってくるシロモノであつた。マ、余り悪口ばかり書くとご本尊の千手観世音菩薩さまから天罰が下るかもしれないので、京都西山の中腹、善峯寺の境内から足下に見下ろせる京都宇治伏見などの街並みや大阪方面に続く平野などの眺めはこの寺の箱庭風情の不興を償って余りあること付記しておきたい。

さて、余談が過ぎた。この寺の札所本尊は桂昌院の念持仏であつたと伝わる天然琥珀製の如意輪観世音菩薩で、そのお姿は些か妖艶と評判が高いそうなので拝顔したかったのであるが、これは非公開の絶対秘仏だそう。代わりに別の如意輪観音が本堂に祀られているがこれも毎月の観音縁日にしか開帳されていないので今回は厨子が開扉されておらず、誠に残念であつた。

寺のパンフレットで見ると、確かに豊満なお姿のようにお見受けした。このお姿は桂昌院と関係あるのかどうか、同じくパンフレットに掲載されていた桂昌院の肖像画は高齢でそのような艶な風情は感じられなかった。マ、左様な想像を逞しくすると、またまた閻魔大王のお裁きが罪一等重くなるので、この辺で止めておこう。



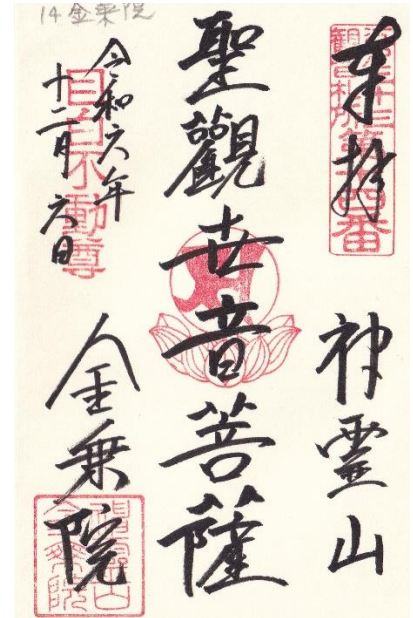
（左：護国寺札所本尊如意輪観世音菩薩 右：桂昌院肖像画 何れも同寺パンフレットより引用）



（江戸名所図会「護国寺と護持院」 広大な伽藍が描かれている。護持院は護国寺の前身寺）

（参拝日：令和6年12月6日）

【第14番】金乗院



東京メトロ「雑司ヶ谷駅」からトロトロと坂道を下ると道なりにこの寺があった。この坂は「宿坂」と呼ばれていて、かつては鎌倉街道で鎌倉往還の宿があったのでこの名が付いたそうだ。関所もあったらしい。往時は樹木が茂った暗い道だったので「くらやみ坂」とも呼ばれたらしい。今は住宅街になっているが往時の面影が残っていた。

この辺り目白台一帯には坂道が多いが、その中でもこの宿坂が一番歴史が古くて深い坂であるそう。

この金乗院は住宅街の中の小刹ではあるが、前の札所の護国寺と同様に徳川五代将軍綱吉とその生母桂昌院の庇護を受けて繁盛した寺だそうで、江戸五色不動の一つ「目白不動」としても参詣者が絶えなかったそうだ。

帰途は宿坂とは別の坂道を下って、今も唯一残っている都電・荒川線の「学習院下」停留所から一両編成の路面電車に乗って次の札所（第15番・放生寺）がある早稲田駅に向かった。この近くには学習院大や日本女子大などがあり、ナウイ格好の学生が大勢歩いていた。



（往時の雰囲気が残る宿坂。左が金乗院）



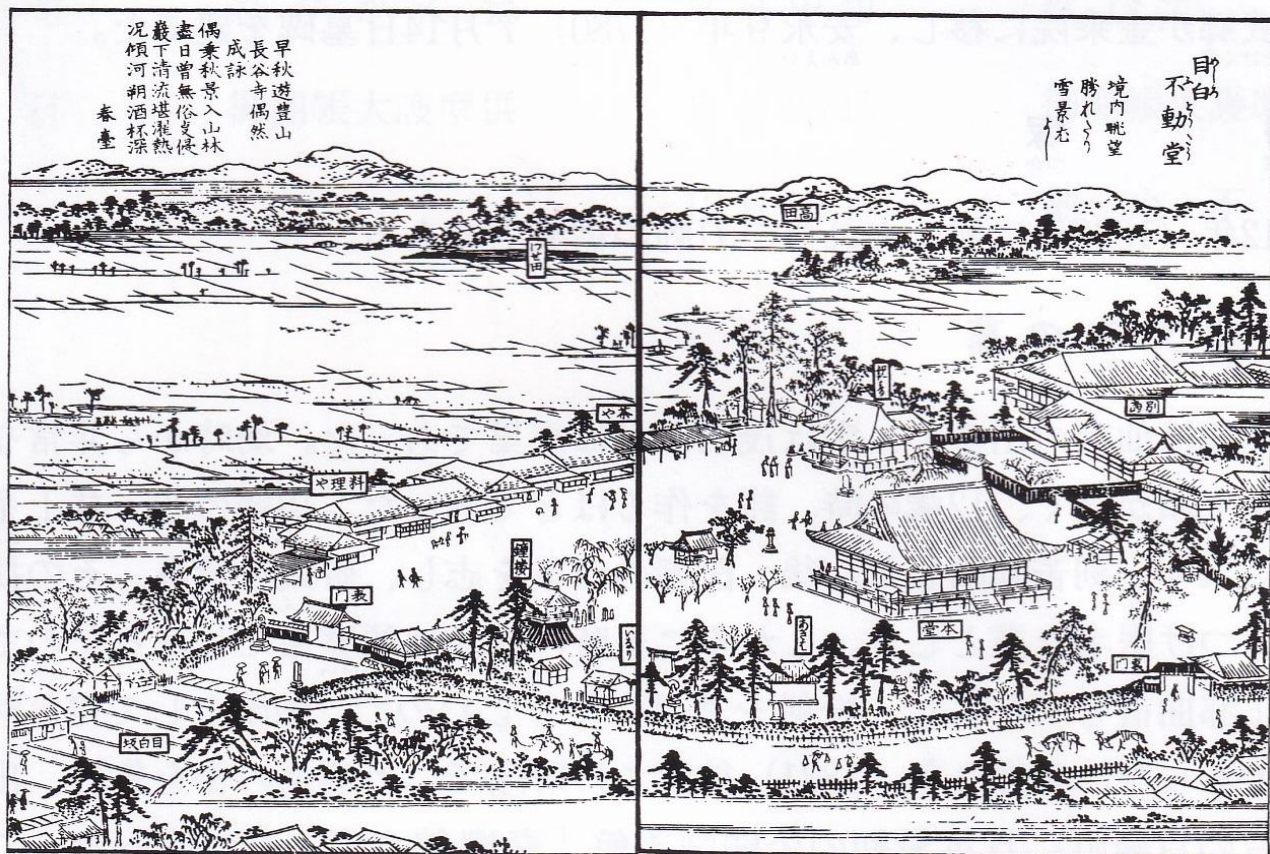
（静かな佇まいの金乗院本堂）

余談になるが、かつて60年程前に九段にあった勤務先の事務所に勤めていた頃に、会社が退けてからその頃は未だ走っていた都電??線に九段坂上から乗って神田やお茶の水の赤提灯街に通ったものだったが、その都電に懐かしくも60年ぶりに乗ったのであった。

（参拝日：令和6年12月6日）

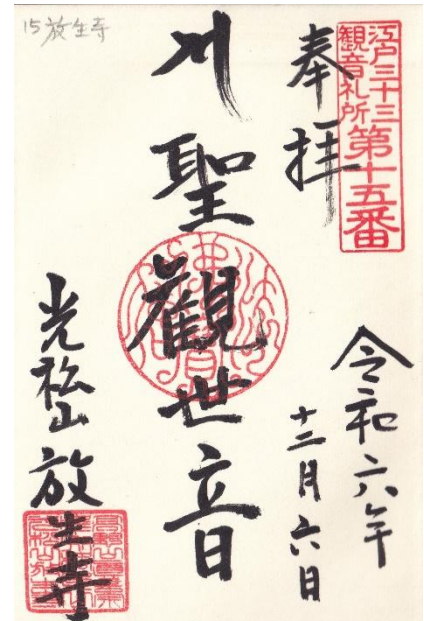


金乗院観音堂「江戸名所図会」



目白不動堂「江戸名所図会」

【第15番】放生寺



都電荒川線の終点「早稲田」で降りて早稲田通りの坂を登って行った。この辺りは早稲田大学のキャンパスが散在し、また学習院女子大学も近いので、それらしき学生の姿が多かった。小生の如き田舎の駅弁大学に通っていた貧乏学生風情と異なり皆さん賢そうで身なりもパリッとしたものだった。

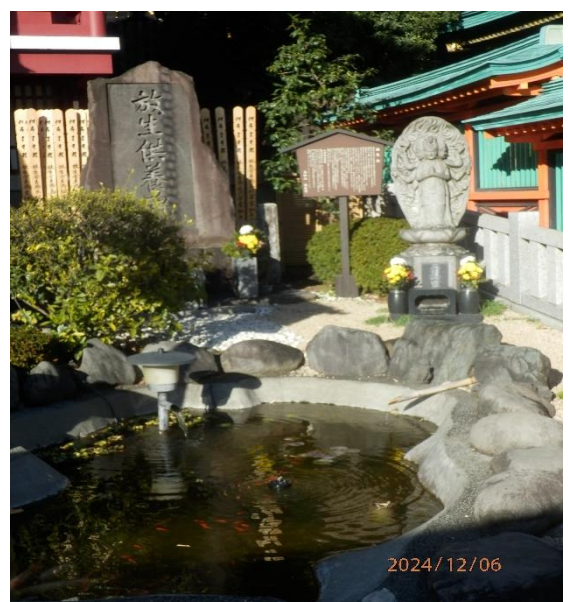
例によって、近くまでは来ていると思うのだが、なかなか目標の寺の位置が分からず、その辺の通行人に聞いても大体は分からないのが普通であるが、この時はたまたま「穴八幡」という大きな神社の傍を通ったので、この神社に聞けば同類のよしみで場所が分かるであろうと社務所で聞いたのが正解であった。聞けば、この放生寺は穴八幡宮の別当寺であったのだそう。そのために、穴八幡の隣の境内がこの寺であった。

参道入口には「一陽来復」と記された提灯がゴマンと掲げられていて壮観であったが、一陽来復というのは、金銀融通、除災招福を祈って庶民の家の居間に貼っておくお札だそう。この札の授与は本邦ではこの放生寺が嚆矢だそう。また、斜面を切り出した狭い境内には寺名の縁起になっている放生池があり、金魚と鯉が放生されて泳いでいた。

(参拝日：令和6年12月6日)



(参道入口の一陽来復の提灯群)



(放生池)

【第16番】安養寺



第16番「安養寺」は神楽坂にある。神楽坂と言えば、かつての江戸の粋な花街であり、今でもちょっと横丁の路地に入ると往時の待合などの古い建物が残っていたりして江戸情緒を感じさせてくれる。もっとも、小生如き無粋な貧乏人には縁が無く、半世紀間以上東京都心に勤めていながら左様な粋な場所には足を踏み入れたことがなかった。

神楽坂一帯には往時は花街の常で沢山の小刹があったそうだが、今は神楽坂大通りに建ち並んだけばけかしいネオンや有名ブランドの洋品店、アウトレットモールなどに追われて姿を消しているそうだが、この安養寺だけは境内が半部以下の広さに縮小されたとはいえ、昔と同じ場所に今でも健在だそうで、誠に結構なことである。納経をしたら、京都・亀屋清永という菓子舗の「清浄歓喜団」というお菓子まで頂いた。この寺本来の本尊が歓喜天であることに由来するのであろうか。

しかし、神楽坂大通りは東南アジアからのインバウンド客でごった返していて、この安養寺もついつい見逃して通り過ぎるところであった。（参拝日：令和6年12月6日）

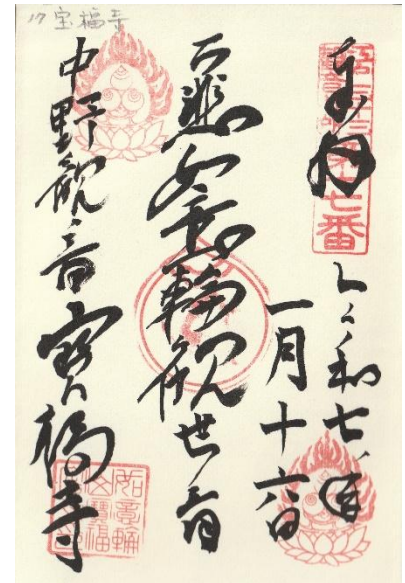


（粋な花街の風情が残っている神楽坂の横丁路地）



（神楽坂の路傍に設置された表示板）

【第17番】寶福寺



この17番札所「寶福寺」と19番札所「東圓寺」の2札所だけが都心から離れた23区西端の中野区と杉並区にあり、最寄駅からも少々遠いので参詣には不便であった。中野区や杉並区は昔の江戸の範囲ではなく辺境の田舎の農村であっただろうから、たぶん江戸時代からの江戸三十三観音霊場札所ではなく、明治以降に新たに札所に編入された寺ではなかろうか。マ、それはともかく。

この寶福寺の札所ご本尊は二臂（二本の手）の如意輪観世音菩薩である。如意輪観音は普通は六臂（六本の手）であるので、二臂の如意輪観音は珍しい。また、観音霊場で如意輪観音を札所本尊とする寺院は少なく、江戸三十三観音霊場ではこの寺と文京区にある第13番「護国寺」の2寺だけである。どちらも宗派は真言宗。

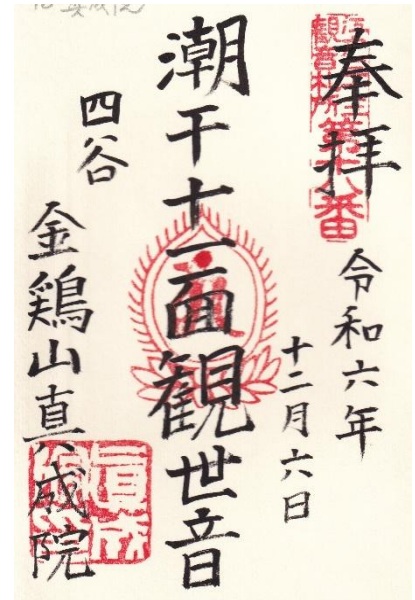
さて、如意輪観音といえば、豊満な官能的な仏様である。仏様に性別は無いが、何となく妖艶な女性の姿態を想像させる。かつて親鸞が性の迷妄に苦しんで京都の六角堂（西国三十三観音霊場の札所の一つ、紫雲山頂法寺、華道池坊の発祥寺）に籠っていた折に、遊女に化身した如意輪観音が夢枕に現れて「行者宿報設女犯 我成玉女身被犯 一生之間能莊嚴 臨終引導生極樂」と告げた。平たく言えば「私（観音）が玉女となって、交わりを受けましょう」という夢告であり、これを聴いた親鸞は同じ堂宇に籠っていたさる遊女と結婚して新しい境地を開いたと伝えられている（このことは、俳優でもあった三國連太郎の著作『白い道 法然・親鸞とその時代』に詳しいのでご一読をお勧めしたい）。

この寶福寺の如意輪観世音菩薩は山門を潜った先のこじんまりとした観音堂に祀られているが、観音堂の扉は固く閉じられていて妖艶な如意輪観音のお姿を拝むことは出来なかった（納経所の話では年一回の観音縁日にだけ開扉するのだそう）。本堂も固く閉扉されていて取り付くシマも無かった。幾何かのお布施と引き換えに御朱印だけを事務的に授与するだけの札所は味も素っ気も無く寂しい限り。（参拝日：令和7年1月16日）

（寶福寺の札所本尊・如意輪観世音菩薩の御影⇒）



【第18番】真成院（しんじょういん）



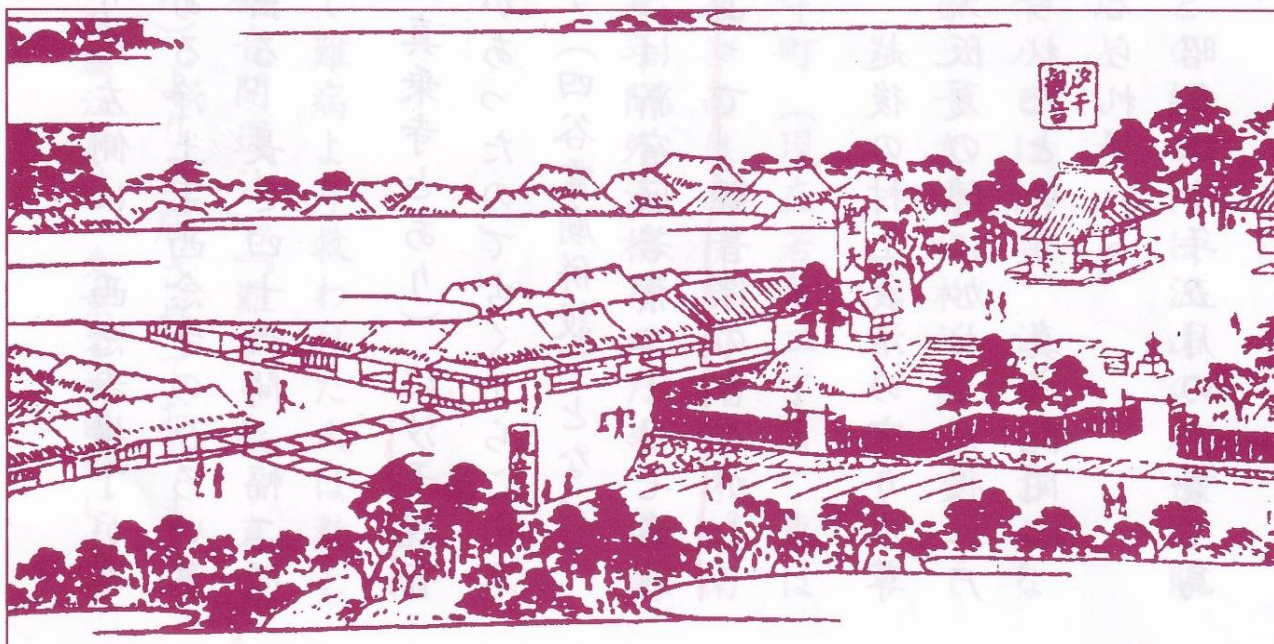
（真成院本堂。小生が参った時は暗闇の中だったので、どこかのHPから借用）

四谷駅から歩いたが、誠に分かりにくい道だった。道が分かっていたら20分ほどで辿り着けるのであろうが、この辺りは全く不案内なのであっちへウロウロこっちへウロウロで1時間掛った。またこの辺りは寺町だそうで、小刹が沢山入り組んで並んでいるので、道を歩いている近所の人に場所を聞いても「この辺には寺が一杯あって、何某寺と言う寺はどの寺かと聞かれても寺の名前はサッパリ分からない」との返事だった。

というような訳で、この真成院は本日5番目の巡礼寺であったから、参拝予定の時刻はとっくに過ぎて真っ暗な闇の中を探して歩くだけでもう大往生であった。やっと辿り着いた時には寺は既に閉門されていたが、裏口から無理やり入って「道が分からずウロウロしていたので、四谷駅から1時間掛けてやっとたどり着きました。遠方から参拝しましたので、閉門後で済みませんが、何とか参詣させて頂けませんか」と無理を言うと、ご親切にも本堂を開扉し、納経も受け付けて頂いた。今時観音霊場札所での授与は珍しい本尊の御影も頂いた。また、内陣の写真撮影を乞うたら喜んで承諾して下さった。

この寺の札所本尊は潮干（しおひ、塩踏とも）十一面観音と呼ばれていて、昔この辺りが海岸であった頃に、露台で道端に祀られていた観音様で、潮の干満によって観音像の台石がしっとり濡れたという縁起に因るそう。寺の横には急な坂道が登っていてこれを観音坂と称しているが、この坂の呼称もこの観音様に由来するそうだ。





（江戸名所図絵 潮干観音。手前に観音坂も描かれている。道端の民家も今も当時と同様な町家が並び、また右側に描かれた潮干観音（真成院）も今は鉄筋コンクリートのビルに建て替えられているが、その街並みや境内の高台の様子の雰囲気は昔も今も全く変わっていないように感じられた。通りを歩いている人々や井戸端会議をしているご婦人や天秤棒で籠を担いだ物売りが現代の今現れても全くおかしくない雰囲気であった）

参拝後、疲れた足を引き摺りながら、その暗闇の観音坂をトボトボと登り、四谷駅に戻った。四谷駅の近くには Sophia University（上智大学）があり、昔会社に勤めていた頃官庁や大学・研究機関などの営業部門を統括担当していたことがあった。その時分にこの大学のコンピュータシステムの商談があり、提案書を英語で提出し、提案説明会では先方の先生方が外国人であったために、提案説明も英語でやったことを懐かしく（ほろ苦く）思い出した。商談の結果は残念ながら国際派の IBM に敗れたが・・・。

序の事に、小生が会員の末席を汚している日本山岳会のルームが四谷の隣の市ヶ谷にあるので、ルーム行ったついでに外濠の土手を花見がてらによく散歩したことも思い出した。今は山も現役ではなくなっているなので、この山岳会の会合に行くことも無くなって久しい。

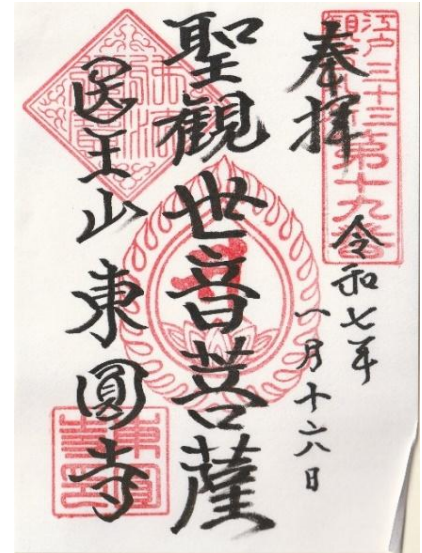
今回の第4回目の巡礼は、第13番札所「護国寺」（文京区音羽）から始めて第18番「真成院」（新宿区四谷）までの5札所を巡ったが、道が分からなくてあちこちウロウロしていた所為もあって、歩数計は23,000歩を数えた（歩行距離に換算して約15km）。

（参拝日：令和6年12月6日）

【第19番】東圓寺



(右：本堂 左：観音堂)

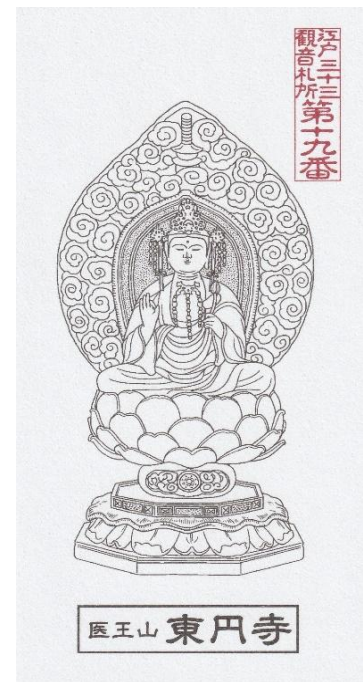


この札所も第17番「寶福寺」と同様に江戸の中心地から離れた杉並区にあるので、江戸時代からの江戸観音霊場33札所には入っていないくて、旧来の観音霊場札所のどこかが廃寺になったりしたためにその穴埋めに明治以降に新たに江戸観音霊場の札所に編入されたものと考えられるが、それにしても大きな寺院であった。

白壁の堀で囲まれた広い境内は寺守によって掃き清められていて清々しく、散り敷いた銀杏の黄金色の落ち葉が鮮やかであった。また、観音堂は僅かではあるが扉が左右に開扉できるようになっていて、祀られた三體の観世音菩薩が近くから拝顔できた。



(中央：聖観世音菩薩、左右：十一面観世音菩薩 許可を得て撮影)



中央の厨子に収まっている本尊は身の丈一尺ほどの小さな金色の聖観世音菩薩で、その左右には等身大の彩色の千手観世音菩薩が祀られていた。3體の観世音菩薩は大きさも塗りも異なっているが、狭い観音堂の内陣に並べて祀られていても違和感は無かった。何れも優しそうな顔をされているからであろう。(参拝日：令和7年1月16日)

【第20番】20天徳寺



(工事用柵で囲まれ立ち入り禁止となっている天徳寺。2025年2月現在)

江戸観音霊場三十三札所の内、新橋や品川界限の湾岸には10ヶ所の札所があり、その内の3ヶ所（天徳院、金地院、増上寺）は新橋・御成門近辺にある。会社生活30数年の大半を新橋にあった会社事務所で過ごしたので、新橋界限は今でも懐かしい場所である。

新橋界限には往時は小料理屋や居酒屋が三千軒あったと言われていて、営業職であった小生は客先を接待することも多く、その内の百軒くらいは常連になっていたが、今は昔の大將夫婦二人でやっていたような小粋な小料理屋は何処も地上げされて姿を消し、界限はミーハー向けの安価だけが取り柄の飲食店高層ビルに様変わりしていて、往時の面影は無いのが残念である。

さて、その新橋界限札所3ヶ所の一つ、天徳寺はNHK放送局発祥の地・愛宕山の麓にあり、裏山を登るとNHK放送博物館があって付近は愛宕山公園になっている。会社で意味も無く上司からイジメられた折には、アタマにきた頭を冷やすために、会社事務所の近くのこの公園に歩いて来て小1時間ほどベンチに座ってアタマを冷やしたことが度々あったが、似たような格好の同僚と鉢合わせしたことも度々あって、退社後に新橋駅近くの赤提灯で待ち合わせて上役の悪口を言い合って鬱憤を晴らしたことも度々であった。

マ、それはさて置き、この寺は今では小刹になっているが、往時は17ヶ寺の塔頭を抱える大刹であり、越前、出雲、津山。松平など十数藩の大家家菩提寺でもあったそうな。

しかしながら、今回訪ねてみると、外壁には工事用柵が張り巡らされていて境内は立ち入り禁止となっていた。柵に貼ってあった張り紙には、大規模工事中につき境内閉鎖、工事完成予定は2027年3月と記されていた。ひょっとしてタワーマンションにでも変身するのではなかろうか。残念、無念。

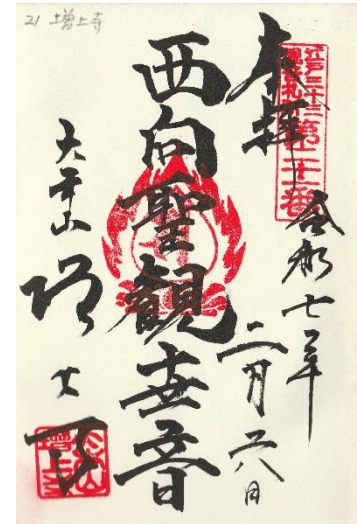
マ、タワーマンションの同じ敷地内に小さなお寺があって、阿弥陀如来や聖観世音菩薩を毎日拝めるといふのならば、それはそれで結構なことではあるが・・・。

(参拝日：令和7年2月6日)

【第21番】増上寺



（芝・増上寺の象徴「三解脱門<中門>」）



増上寺は今更説明をする迄もない名刹・大刹である。徳川家康の江戸入府以来代々徳川家の庇護を受けて、往時は寺域 20 万坪、子院 50 寺、学僧 3,000 人、寺領 1 万石を数え、江戸第一の名所として参詣者で賑わっていたという。しかし、昭和 20 年の大空襲により、三門、御成門、惣門、二天門だけを残して全てが灰燼に帰したが、昭和 27 年から再建が始まって本堂始め諸伽藍が整えられて現在に至っているようだ。

札所本尊は、鎌倉時代の作と言われる石造の西向き聖観世音菩薩が小さな御堂の中に安置されていた。江戸観音霊場 33 札所の中でも、石造の観世音菩薩を本尊としている札所はここ増上寺 1 寺だけである。

往時の増上寺の盛況を下記の安藤廣重筆「東都名所・芝増上寺」でご覧ください。

（参拝日：令和 7 年 2 月 6 日）



（西向き聖観世音菩薩）



【第22番】長谷寺（ちょうこくじ、大本山永平寺別院、麻布大観音）



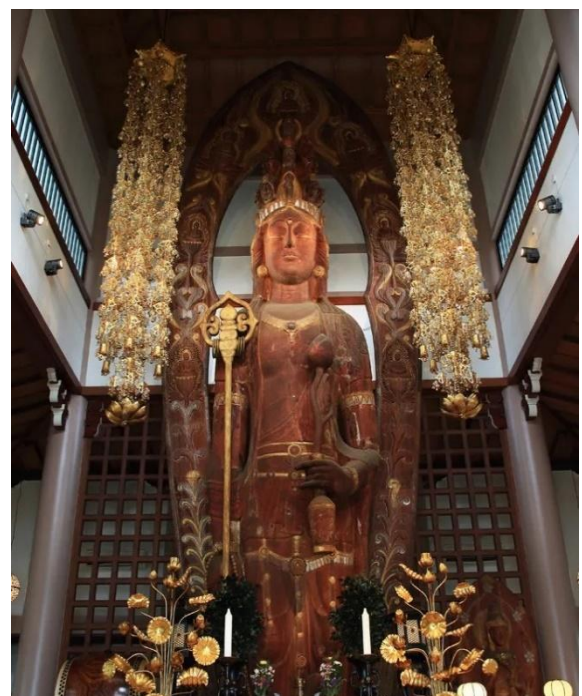
港区西麻布にある大刹であった。境内も広く落ち着いている感じがした。本堂の右手には高さ5丈の重層入母屋造りの観音堂があり、日本最大級の三丈三尺10mの巨大な十一面観世音菩薩（麻布大観音）が祀られている。光背を含めれば高さ12mも及ぶそうだ。

寺伝によれば、昔々にこの一帯は「渋谷ヶ原」と呼ばれていて、その一角に奈良及び鎌倉の両長谷寺の本尊・十一面観世音菩薩を彫像した残りの木材の破片で刻まれたという小さな観音様を祀った小さなお堂があり、そこに徳川家康が2万坪の寺領を与えて開かせた由緒ある古刹だそう。その後、奈良・鎌倉の長谷寺に倣ってこの小さな観世音菩薩を胎内に収めた三丈三尺の大観世音菩薩を刻み大観音堂も建立されて、江戸時代から江戸三十三観音霊場の札所として賑わったという。

しかし、関東大震災や東京大空襲により伽藍も本尊も全て焼失、戦禍で焼失した観音像に替わり10年の歳月を掛けて樹齢6百年の樟の一木彫で同じ高さ三丈三尺の十一面観音菩薩像が新たに刻まれ、おなじく新しく建立された高さ5丈の重層入母屋造りの観音堂に納められて現在に至っている由。観音堂は毎日開扉されているので、観音様を目の前で拝めたが、余りにも大きすぎて圧倒され、見上げる首が痛くなって眩暈がしてきた。



（観音堂）

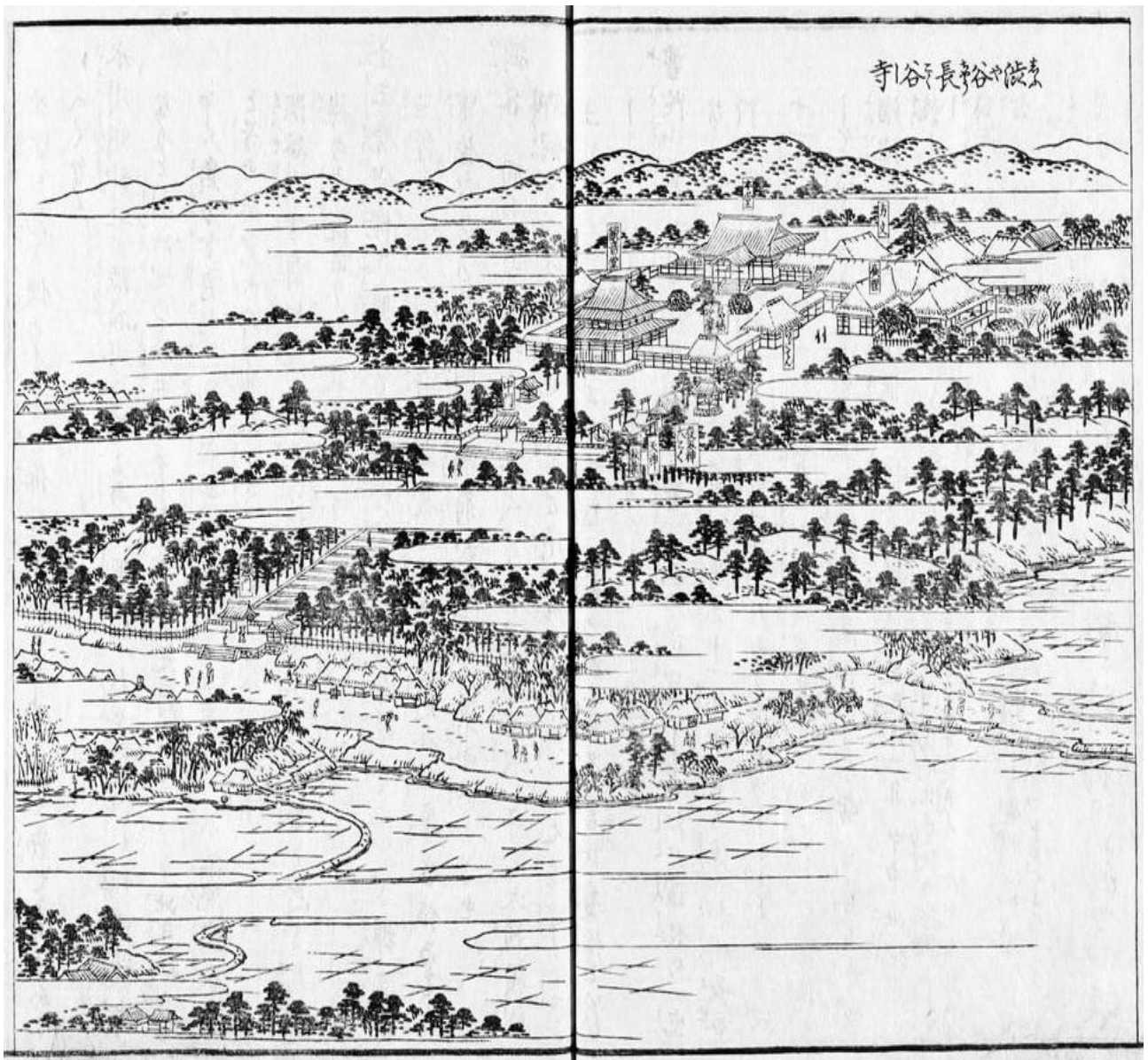


（三丈三尺の十一面観世音菩薩 同寺HPより引用）

帰りにこの寺の墓地に寄った。明治の元勲井上馨、画家の黒田清輝、喜劇役者のエノケン、日航機墜落事故で早逝した歌手の坂本九の墓があった。

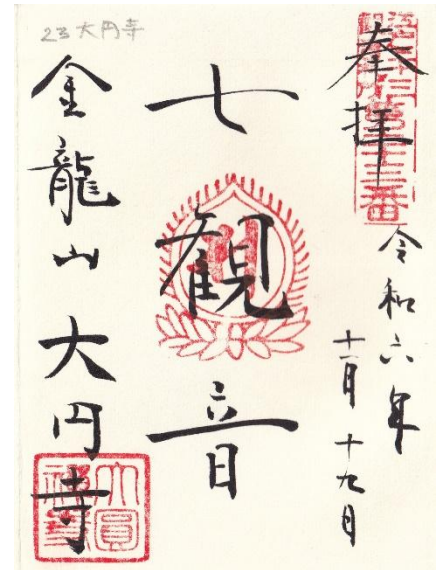
坂本九が歌った「見上げてごらん、夜の星を」や「上を向いて歩こう」は、折からの吉永小百合などの昭和純情青春映画と相まって昭和青春歌謡の大ヒット曲となって一世を風靡したものだ。

坂本九の墓前で、永六輔作詞、いずみたく作曲の60年程前に大ヒットした～♪見上げてごらん夜の星を 小さな星の小さな光がささやかな幸せを 歌ってる♪～を思い出して心の中で口ずさんでいると未だ学生だった頃の往時のモロモロのことなどが懐かしく思い出されて、眼がしらが潤んでくるのであった。合掌。（参拝日：令和7年1月24日）



（江戸名所図会「渋谷長谷寺」。広大な境内が描かれている。下方左側から惣門、中門、観音堂、本堂が広い境内に一直線に伸びているの見える）

【第23番】大圓寺



この札所の番付は23番であるが、なぜか8番から11番までの札所と同じ文京区の地下鉄・本駒込駅や白山駅の近くにあったので、これらの寺と同じ日に廻った。

札所本尊は明治時代の仏師・彫刻家であった高村光雲翁刻の観世音菩薩変化七像*であったが、これは第二次大戦の空襲で全て焼失してしまったので、今は翁の門下生達によって再現された七観音像が祀られているそうだが、残念ながら本堂は閉扉されていて拝観できなかった。その代わりに、本堂前に建立されていた高い露座の銅製観世音菩薩立像は存在感があった（上写真左上部）。

山門を入ったすぐ前には「焙烙地蔵尊」が祀られていた。焙烙（ほうろく）というのは素焼きの大きな浅い土鍋で物を炒るための道具である。この地蔵様の頭には焙烙が何枚も被さっていて、願い事をして祈願がかなった信者が焙烙を奉納して頭の上に置くのだそう。また、一説によれば、第11番・圓乗寺(P. 16 参照)で触れた八百屋お七の霊を供養する為に建てられたものとも言われている。火炙りの刑で処刑された八百屋お七の火炎の熱さをこの地蔵様に身替わり引きで受けて貰うように、同じく火炎で炙られる焙烙に託して身替わり焙烙地蔵を祀ったのであろう。往時の庶民がお七に寄せた哀憫の情が偲ばれる

（参拝日：令和6年11月19日）



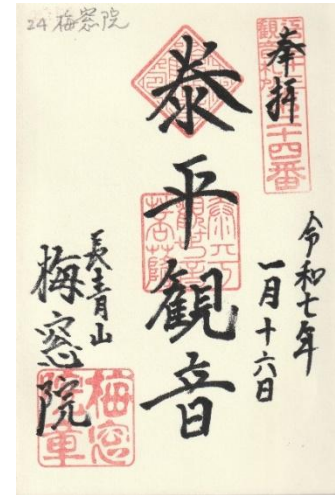
（山門 奥に見えるの祠が焙烙地蔵尊）



（頭に焙烙を被っている焙烙地蔵尊）

*観音変化七像：聖観音、千手観音、馬頭観音、十一面観音、如意輪観音、准胝観音、不空罽索観音

【第24番】梅窓院



(正面の階段があるガラス張りのビル二階が本堂、一階が観音堂 右のガラス張りは寺院会館)

この寺はミーハーご用達の外苑前の青山通りにあったが、大通りからは少し奥まった参道の奥にあるので、青山通りのミーハーの喧騒からは免れていた。参道は竹林となっていて、突き当りには由緒ありそうな山門があり、ここまではどこの古刹・名刹かと思わせるような佇まいであったが、山門を潜った先の境内はガラス張りの高層ビルに囲まれたビル群の谷底で、とても寺院とは思えないガラス張りの4階建てのモダンなビルが建っていて、これが本堂であった。聞けば建築家・隈研吾氏の設計だそうで清楚感溢れる芸術館風のモダンな建物ではあったが、やはり神社仏閣は昔ながらの瓦屋根や茅葺の伽藍の方が趣がある。冒頭の現在の伽藍と次頁の江戸の頃の伽藍の様子を比べられたい。

しかし、御朱印係の若い女性は大変親切であった。御朱印も丁寧に押され、上手下手はともかく筆も丁寧であった。御朱印帳は少々時間が掛るので、暖かい参拝者休憩所の方で座ってお待ちくださいと言われて待っていると出来上がった御朱印帳を寒い中、態々休憩所まで持って来て下さった。札所には全く愛想の無い寺も多いが、このように親切にして頂くと、何か仏縁を頂いたようで気持ちも暖かくなるのであった。



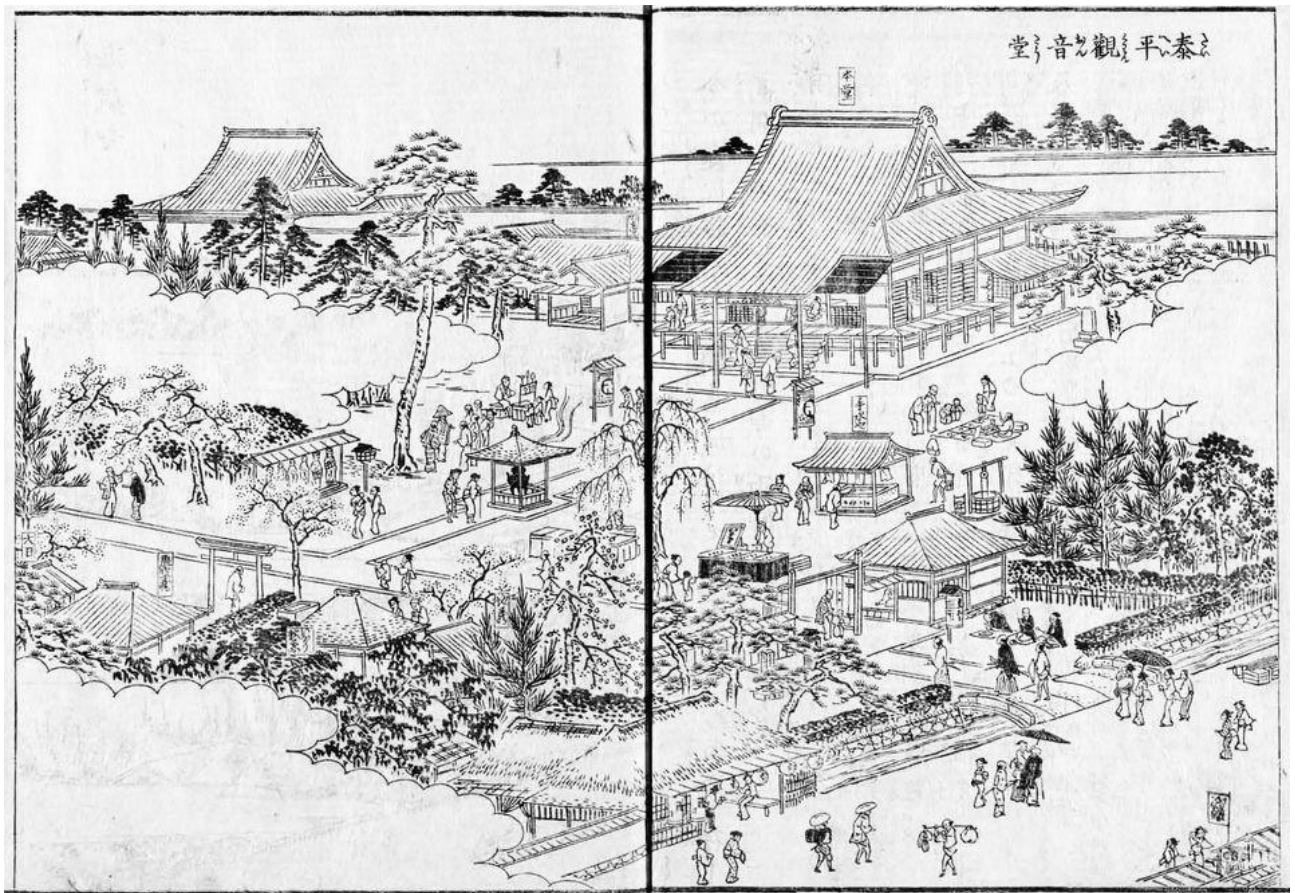
(参道の竹林やその先の山門は如何にも古刹を思わせたが・・・)



(札所本尊：泰平観世音菩薩)

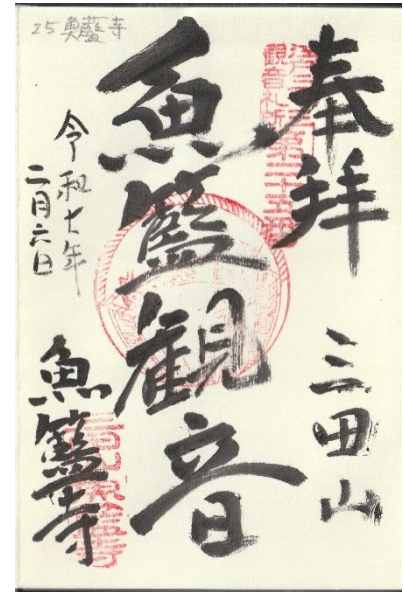
この寺の札所本尊は、唐招提寺開祖の鑑真和尚が中国から招来し、奈良東大寺大仏殿に奉安されていた「泰平観世音菩薩」と伝わるが（前頁、同寺HPから引用）、「青山の観音様」として広く衆生からの祈願を集めている仏様であるそう。残念ながら本日は観音堂は葬儀の為クローズされていたので青山の観音様は拝顔できなかった。

（参拝日：令和7年1月16日）



（江戸名所図会 泰平観音堂（梅窓院））

【第25番】魚籃寺



この寺は第27番「道往寺」に参った後、魚籃坂を上って拝観した。「魚籃」というのは漁師が捕った魚を入れておく魚籠（びく）のことで、観世音菩薩が魚を売り歩く魚屋の若き娘に化身してこの世に垂迹された姿が魚籃観世音菩薩と言われている。魚籃観音を本尊に祀っている寺院は非常に少なく、全国でも数寺だけではあるまいか。この観音様は魚籠を手に持っていてその中に採った魚が一匹入れてあるお姿であるが、美人の誉も高いという観音様でもある。観音様にしろ弁財天様にしろ、仏様には男女の区別は無いが、弁財様と同様に観音様もどことなく女性をイメージさせる艶な色艶をお持ちのようである。お顔も美人の姿に造られているものが多いようだ（馬頭観音のように憤怒の形相の観音様もおられるが・・・）。

この魚籃寺の魚籃観世音菩薩は身長僅か六寸の木造仏で年に1日間しか開帳されない秘仏だそうで、平生は等身大に拡大された前立が祀られている。よって今回は秘仏の御尊顔にお目に掛かれなかったのが残念であったが、上記のような邪念を持ってそのお顔を拝顔すれば、たちまちに観世音菩薩のお怒りに触れて邪念の輩は眼を御慈光で射抜かれること必定であろうから、そのような障りを起こさないように下々の輩どもには姿をお見せにならないというご慈悲であると感謝・観念しなくてはなるまい。

（参拝日：令和7年2月6日）

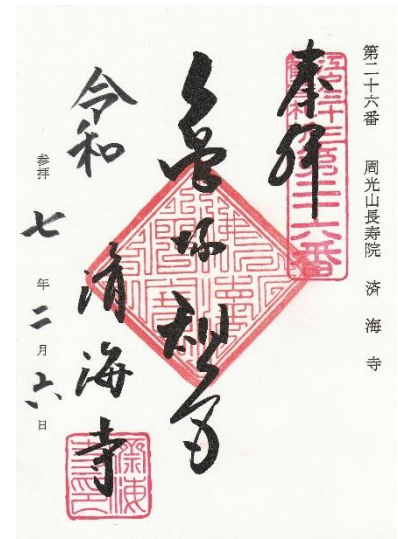


（魚籃観世音菩薩お前立。右手に持っておられるのが魚籠。同寺HPより引用）



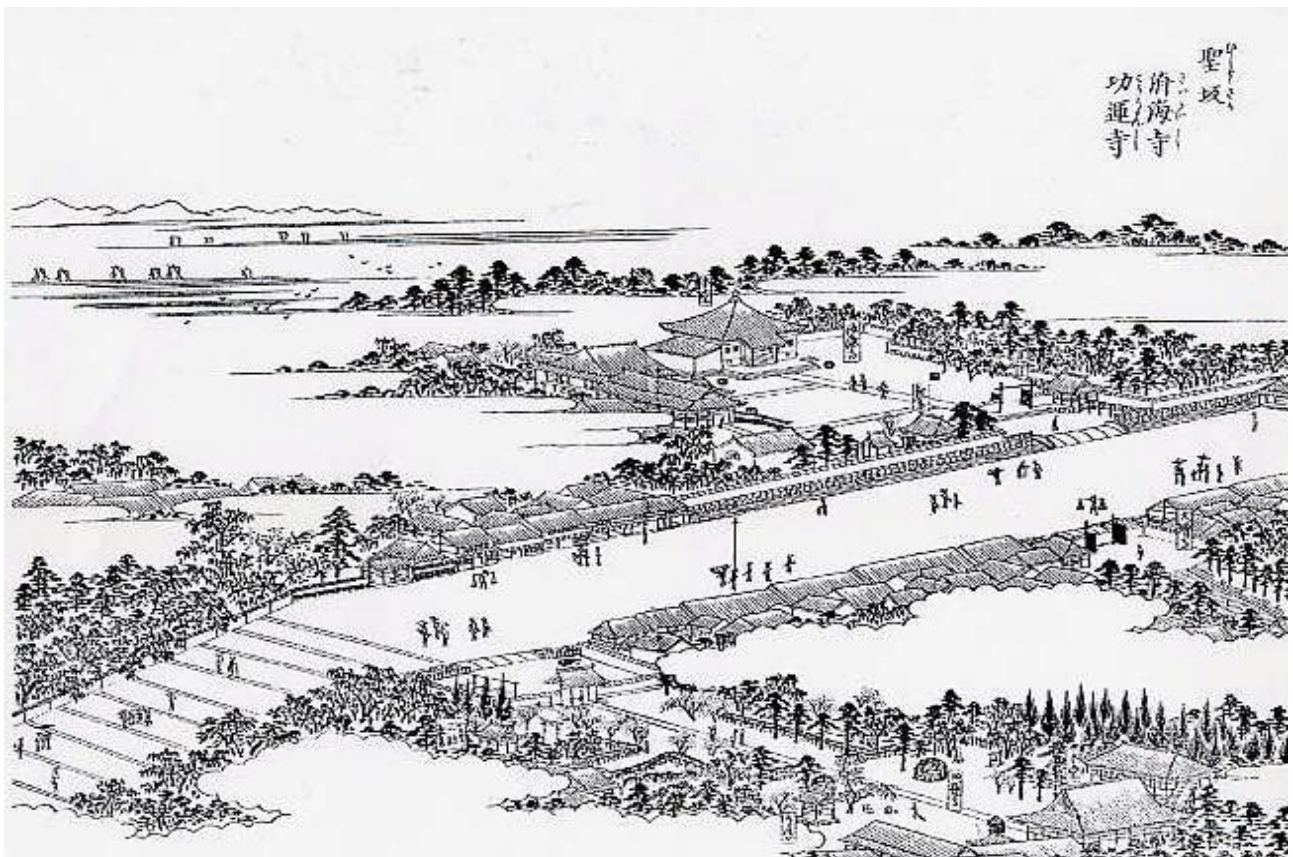
(賑わっている江戸時代の魚籃寺と魚籃坂。江戸の頃は品川湾の干拓は未だ始まっていなかった所以旧東海道品川界隈はすぐ海に面していた。右上にすぐ品川湾が見えている。しかし、現在では周囲に建て混んでいるビルに邪魔されて斯様な眺めは無い。江戸名所図会「魚籃観音堂」より)

【第26番】 済海寺



第25番魚籃寺を参拝した後、聖坂を上って行くと第26番札所「済海寺」がある。この寺の伽藍は上の写真のように洋風の建物で、門柱が無ければ寺院とは分からないような寺であった。加えて本堂も観音堂も固く閉扉されていて本尊を拝む術も無く、風情も取り付くシマも無かった。

聖坂や済海寺は高台にあるだけあって、往時の眺めは絶景ですぐ眼下の江戸湾から房総の山々まで一望であったと江戸名所図会に記されているが、図絵に描かれている見渡す限りの眺望は極楽浄土もかくやと彷彿させたのではなかろうか。しかし、現在は高層ビル群に阻まれて斯様な眺望は全く望めなかった。（参拝日：令和7年2月6日）



（江戸名所図会「聖坂、済海寺、功運寺」）

【第27番】道往寺



港区三田界限には第27番「道往寺」、第25番「魚籃寺」、第26番「済海寺」の3札所が徒歩圏内にあり、脚力の衰えた小生でも2、3時間程でゆっくりと徒歩で廻ることができた。但し、坂が多い台地なので結構息が切れてしょっちゅう路傍の歩行者道の柵に腰掛けて休憩を取らなければならなかった。

想えば、生まれて初めて遍路・巡礼（徒歩）なるものの真似事を始めたのは今から10年程前のことで、最初は四国遍路八十八箇所徒歩一周だった。もっとも動機が行道（遍路や巡礼、懺悔の苦行等）という真面目な宗教的な動機からではなく、物見遊山や紅灯の巷や門前町裏通りの赤提灯が主たる目的という極めて不真面目なものであったから、その後つついこの葦酒の巷の中に深入りしてしまってこの10年間で四国遍路八十八箇所徒歩行脚2回、日本百観音霊場100札所（西国、坂東、秩父）徒歩巡礼2回、地方のミニ版ローカル写し観音霊場巡礼、四国写し遍路ミニ版などを巡り、これが嵩じて昨年の夏には異教徒邪宗門の身ではあるが、スペイン・カミーノ巡礼（フランス人ルート徒歩800km巡礼、1ヶ月間）を歩いて、合計で9,000km程の巡礼旅となった。

しかしながら、動機が不純であるから巡礼の功德や験などというものは顕れず、ましてご利益などというものも全く縁が無い儘というのが哀しいところである。

また、10年前には時速4km/hで歩けた歩速が現在ではせいぜい2km/hしか出ないと言う情けない体たらくであるが、これもお迎え&世代交代が近いという八十路を越えた老体には無理からぬところでもあろうと慰めているところである。世代交代は避けられない世の常であるからして、役立たずになった老体は世の中のお荷物になる前に早めに後進の世代に命を渡した方が理に叶っているというべきであろう（即ち、命を後進の肥やしに差し上げること。森林の世代交代で言えば苔むした倒木が孫の世代のnurse bedとなること）

さて、余談はさて置き、その三田界限の札所3ヶ寺の巡拝は、JR高輪ゲートウェイ駅から歩き始めて第27番「道往寺」、第25番「魚籃寺」、第26番「済海寺」の順に巡拝し、済海時からは都営地下鉄三田線の三田駅迄歩き、そこから次のやはり3札所が隣接している芝公園・新橋地区に足を延ばすために地下鉄で一駅先の芝公園駅まで乗車した。

都心の地下鉄で短い駅間の一駅区間ぐらいなら、駅のホームや階段でウロウロしている時間で歩ける場合も多いが、次の駅までの道順を間違えて裏道に入ってしまったロス・ポジションになってウロウロと歩き回っている間に草臥れ切るというケースが多かったの

で、電車に乗れる区間は電車に乗った方が助かるという横着根性に慣れてしまった。

さて、前置きの余談が長くなったが、最初に巡拝した第 27 番札所「道往寺」へは高輪ゲートウェイ駅から忠臣蔵で名高い泉岳寺方面への伊皿子坂を 15 分ほど登って行った場所にあった。緩い坂道ではあったが、かなり長い坂道であったから朝一番の足には少々キツかった。

この寺は家並が立て込んでいる一角にあったが、本堂の伽藍はガラス張り片流れ屋根のモダンな明るいビルであった。聞くとところによれば、色々な人が遠慮なく集えて敷居の高さを感じない開かれた寺院にしたいという住職の願いを叶えた伽藍だそう。

ガラス張りの小さな観音堂には札所本尊二體（聖観世音菩薩、千手観世音菩薩）の周りに西国観音霊場三十三札所の写し観音 33 観音が所狭しと祀られていた。徒歩で 2 回行脚した西国観音霊場のことなどを思い出しながら拝んできた。

上記の住職の方針とは逆行するようであるが、寺本来の本尊・阿弥陀如来が祀られている本堂には単独の参拝者は入堂できず、内陣の祭壇からはかなり離れた外壁のガラスの覗き窓から拝むようになっていた。阿弥陀如来像をデジタル画面で拝むような隔靴搔痒感を免れなかった。仏像を拝顔する時は、やはり仏像の古色蒼然たる匂いや線香の匂いが満ちている堂内で、できれば内陣の仏様の足下で拝みたいものである。マ、仏像の保存管理、盗難防止などの理由での規制も理解できない訳ではないが、そもそも仏像は衆生との仏縁に本来の姿がある訳だから、衆生が拝むことによって多少痛みが早まろうとも、それはそれで仏様も望まれることではなかろうか（卑近な例で言えば御賓頭盧様や寝釈迦様の撫で仏など）。仏像は如何に貴重な仏像であっても、単なる“美術品”ではなく、衆生を済度する御仏であり、常に衆生の心と糸が繋がっていなければその用が足せないと思うのだが如何なものだろうか。



（観音堂の観音像。厨子の中が聖観世音菩薩、手前は千手観世音菩薩。左右には西国観音霊場 33 札所の写し観音 33 體が並んでいた。許可を得てガラス扉の外から撮影）

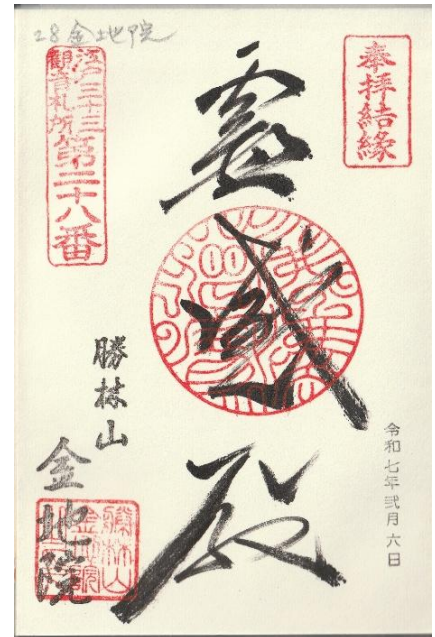
余談であるが、この寺の開門時刻午前9時前に拝観したのであるが、たまたま開門の準備で境内に出て居られた若い住職夫人（？）が丁寧に伽藍の様子を説明して下さった。また、冒頭に掲げた御朱印帳の記載もして下さったが、素人目にも見事な達筆とお見受けした。札所本尊が二観音祀られているので、本尊の欄には「聖・千手観世音」と力強い筆致で書かれていた。

また、この寺は品川湾を眼下に見下ろす高台にあり、海からの日の出と海に浮かぶ満月の絶好の展望台としても賑わったそう（下写真：歌川國輝・江戸名所「高輪ノ月見」）。現在は周りを高層ビルに囲まれていて、そのような面影は無かったが・・・。



（参拝日：令和7年2月6日）

【第28番】金地院



(正面奥に見える白い向拝が付いた六角伽藍が本堂)

この札所は第21番・増上寺の直ぐ近く、東京タワーのすぐ向かいにあった。江戸観音霊場33札所の内、唯一の臨済宗。

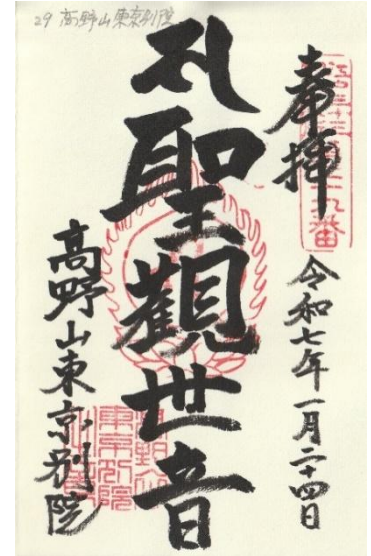
本堂は閉扉されていたが、御朱印を頂きに庫裏に行くと、「ご朱印を準備している間に、庫裏から廊下を通って本堂に入ってお詣りして下さい」と言う親切なお言葉。誰も居ない静かな内陣で独り正座して拝んでいると、信仰心の無い小生でも心が和んだ。

(参拝日：令和7年2月6日)



(金地院 須弥壇。中央奥が札所本尊・聖観世音菩薩。許可を得て撮影)

【第29番】高野山東京別院



(堂々たる本堂。左の仏像の列はミニ四国遍路の札所写し本尊)

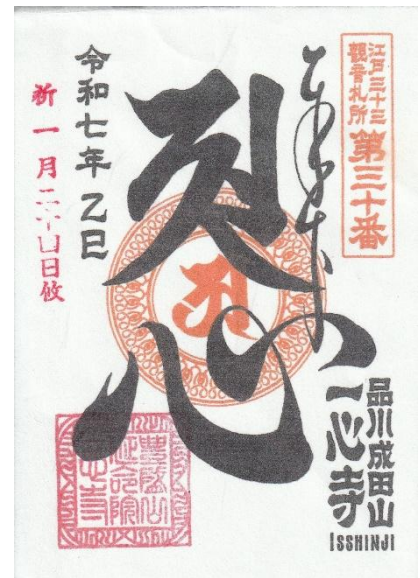
この寺の本堂本尊は弘法大師であり、同じ本堂の内陣に札所本尊の聖観世音菩薩も安置されていたが、どこに祀られているのかよく見えなかったが、よく眼を凝らして探すと内陣手前右側のローソク立ての後ろに小さく祀られていた。また、山門から本堂までの参道には弘法大師に因んで四国遍路八十八札所の写し本尊とお砂踏みが並べられていた。

既に10年以上も前の事になるが四国遍路は本地を2周歩いて遍路したが、ミニ写し遍路は日本各地の寺々にありそれらのミニ巡礼も合わせると既に百回くらいは遍路巡礼を結願した勘定になるので多少の功德はあったと思いたい。(参拝日：令和7年1月24日)



(本堂内陣 左が本堂本尊の弘法大師、右の小さな厨子に札所本尊の聖観世音菩薩。許可を得て撮影)

【第30番】一心寺



品川区には江戸観音霊場の札所は3ヶ寺しかない。その中でもこの一心寺は、旧東海道に面した旧品川宿の目と鼻の先にある街中の小刹であった。寺伝によれば、安政年間に大老井伊直弼が鎮護日本、開国条約、宿場庶民繁栄安泰を祈願して開山、地元衆によって建立された寺院で、品川成田不動尊として近在に親しまれている“我が町の俺が寺”だそう。ご近所の善男善女が所用の序に下駄履きでお線香を上げにちょっと立ち寄るような境内の風情であった。境内というほどの境内も無く、小さな山門と、山門の小ささに負けないような極く小さな本堂があるだけの民家一軒分の敷地にも及ばない小刹であった。

旧品川宿は東海道中第一番目の宿場で、此处を通して参勤交代する大名行列の数は150大名家もあって、一心寺の門前も行列の武士で賑わい、旅籠も百軒以上に及んだと言う。

この寺から品川区にある残りの江戸観音霊場2札所の次の31番札所「品川寺」及び品川寺の一軒隣にある番外札所「海雲寺」迄の巡礼路は旧東海を歩く道であったが、残念ながら今はその面影は殆ど残っておらず、僅かに“旧東海道 品川宿商店街”と書かれた路傍の標柱が往時の面影を偲ばせているだけだった。



余談であるが、この寺のご朱印は書き置きで、朱印も寺名の記帳も予め印刷されていて、参拝日の記載もゴム印であった。ご老体の住職一人しかいないような小刹では朱印までは手が回らないのかも知れないが、何となく風情の無いご朱印ではあった。

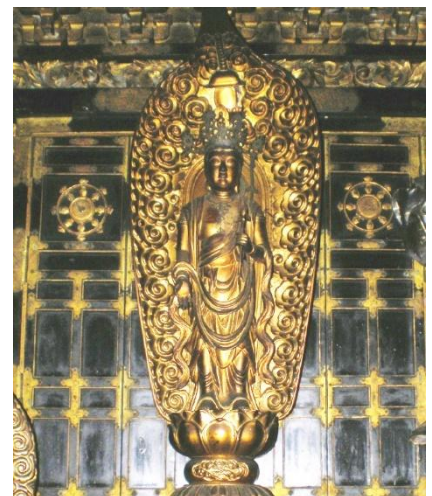
(参拝日：令和7年1月24日)

【第31番】品川寺（ほんせんじ）



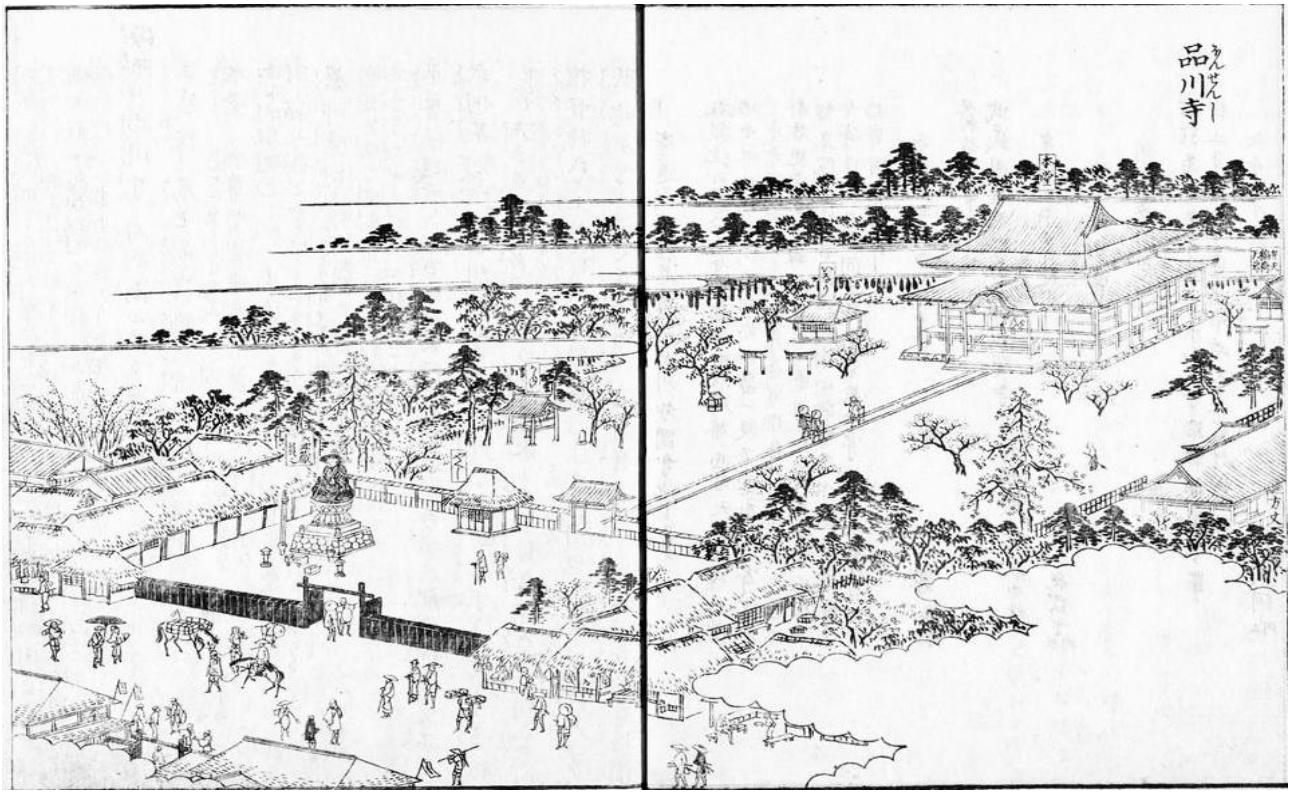
通称、しながわでら。平安時代前期開創の品川区では最も古い寺院だそう。南品川の旧東海道に面しているこの寺の入り口では江戸六地蔵の一つが高い台座に座って迎えてくれた（上写真）。この地蔵様は江戸六地蔵の中で最も早く造られたもので、大きさも最も大きく像高は3mもある堂々とした地蔵菩薩であるが、1,200年も前から東海道を通る旅人を見守り続けているそう。

また、札所本尊が二体あるという珍しい寺でもある。水月観世音菩薩と聖観世音菩薩の二体であるが、本元は前者の方らしく、後者の方は開創後の寺の折々の命運の推移によってある折に祀られたもののようだ。水月観音という観世音菩薩は池の水面に映った月の影を見下ろしているお姿であるそうだが、残念ながらこの寺の水月観世音菩薩は秘仏として公開されておらず拝顔できなかつたのが残念であった。（参拝日：令和7年1月24日）



（聖観世音菩薩、同寺 HP より）

（本堂内陣。暗くてよく見えなかったが、手前に奉ってあるのが聖観世音菩薩、秘仏の水月観世音菩薩はその奥の厨子らしき扉の中に安置されているのではなかろうか？）



(江戸名所図会・品川寺。手前は品川宿。黒門の左奥の像が江戸六地蔵の一つ、左上部は品川湾)

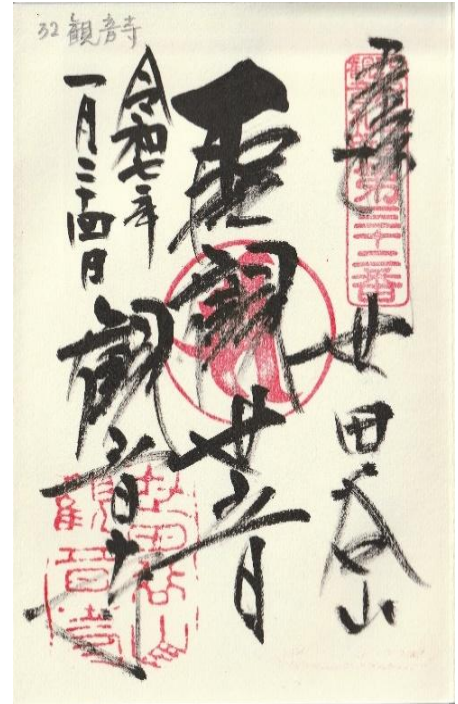


(現在の山門)

【第32番】観音寺

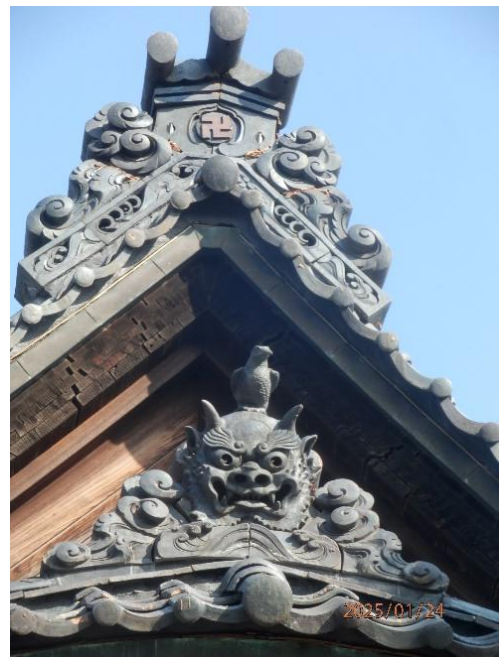


(天井に鳴き龍の彫刻が施された山門)



森に囲まれ古色蒼然たる伽藍は如何にも由緒あり
そうな古刹を感じさせる風格があったが、聞けば昭和時代になってから在家の僧侶が独力で創建した単立の寺院とのことである。山門（仁王門）の天井には鳴き龍の彫刻が施されていて、真下で手を敲くと天井からゴ〜ンゴンと響く龍の鳴き声（？）が戻って来た。山門の鬼瓦の鬼は何となく笑っているようでユーモアがあった（右写真）。

また、観音堂に祀られている本尊の聖観世音菩薩は往古より「世田谷観音」として霊験新たかなそうで特にご婦人の参詣者が多いらしい。



(観音寺本堂（右）と本尊：聖観世音菩薩。本尊写真は同寺HPより引用)

また、山門（仁王門）を入ってすぐ左には二層の堂々たる見事な六角堂（不動堂）が建っていた。堂内には不動明王を中心に左右に八大金剛童子が祀られているようで（国指定重要文化財）、八大金剛童子像を全て従えている不動明王像は全国の寺院でも珍しく、この寺と高野山・金剛峯寺の二寺にしかないそうだ。八大金剛童子とは不動明王に付き従う8人の童子を指し、是非拝観したかったのであるが、不動堂は毎月28日にしか開扉されないとのことで誠に残念であった。



（六角形が美しい六角不動堂）



（不動堂に祀られている不動明王 同寺 HP より引用）

ご参考までに八大金剛童子は下記の通り（八大金剛童子像は高野山霊寶館蔵より引用）
（参拝日：令和7年1月24日）



（矜羯羅（こんがら）童子）



（清浄比丘（しょうじょうびく））



(慧喜 (えき) 童子)



(慧光 (えこう) 童子)



(制吒迦 (せいたか) 童子)



(烏俱婆伽 (うぐばか) 童子)



(阿耨達 (あのかた) 童子)



(持徳 (指徳) (しとく) 童子)

【第33番】瀧泉寺（りゅうせんじ、目黒不動尊）



江戸観音霊場三十三札所巡拝も愈々最後の結願寺となった。この寺の最寄り駅は JR 山手線目黒駅で、往古の巡礼行者（行人）が通った坂道から名付けられたらしい「行人坂」なる坂道を徒歩で下って行くと 20 分くらいで到着できると踏んでいたが、坂道を一本間違っ隣末広がり状の権田坂なる坂道に迷い込んだりしていたので、三角形の一边ではなく二辺を繋いで歩く羽目になって、しかもウロウロと脇道に迷い込んだりしていたので 1 時間以上も掛ってしまって疲労困憊の体たらくになった。寺守の人に聞くとご婦人の足でも 20～30 分くらいで到着できるそうだから、ガッカリ&ウンザリであった。満願なる結願には程遠い結果となったが、これも未だ然るべき修行とお布施が足りないという閻魔大王のお裁きであろうと観念せざるを得ない。イヤハヤ、全く。

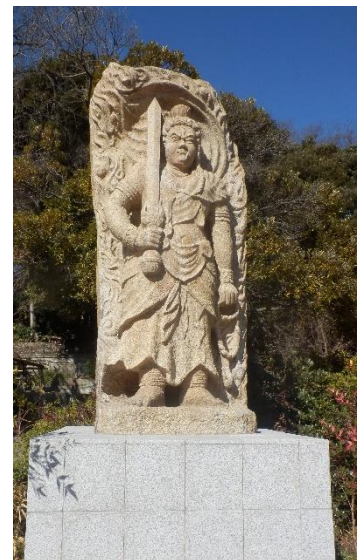
さて、この札所・瀧泉寺はナルホド、結願寺とされるだけのことはあって広大な境内には本堂、観音堂、不動堂、阿弥陀堂などの伽藍が整然と並んでいた。また、この寺は千葉の成田不動尊、熊本の木原不動尊と並んで日本三大不動尊の一つで、関東最古の不動霊場「目黒不動尊」でもある。不動様が立っておられる池泉（独鈷の瀧）にはどんな干魃でも枯れる事が無い瀧水が流れていた。その瀧水を柄杓で汲んで水掛不動尊に掛けておいた。



（独鈷の瀧）



（独鈷の瀧の水掛不動尊）



（山門を鎮護する不動明王）

観音堂の扉は閉扉されていて狭い格子窓しか開かれていなかったのですが、三體の観世音菩薩が祀られていて、中央が札所本尊の像高8尺の聖観世音菩薩立像、両翼には高さ3尺3寸の千手観音、十一面観世音菩薩が安置されているそう。



(観音堂。御堂の前庭には枝垂れ梅が綻び始めていた)



(聖観世音菩薩 許可を得て撮影)

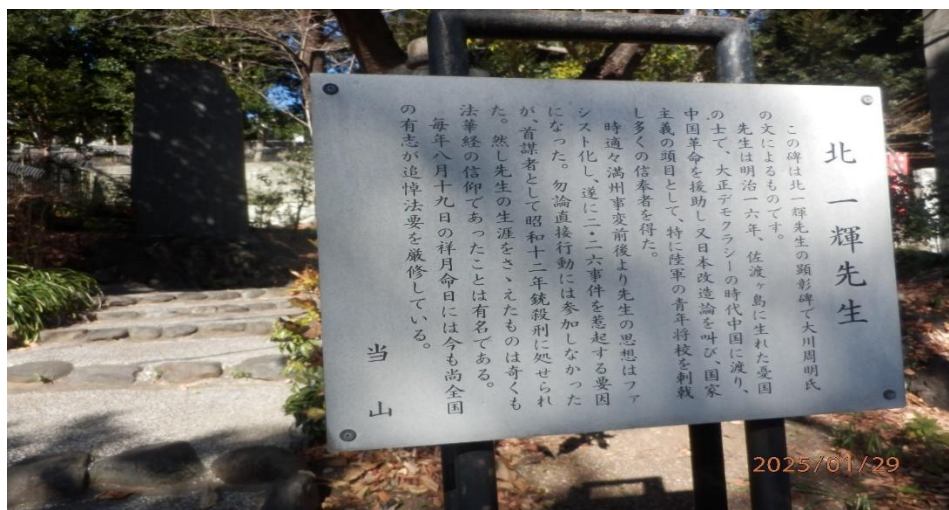
また、境内には救荒作物・甘藷（薩摩芋）栽培を広めて本邦の飢饉を救った青木昆陽先生の顕彰碑があった。また、2.26事件の理論的首謀者として軍法会議に掛けられ銃殺刑になった右翼思想家・北一輝の碑もあった。



(甘藷先生<青木昆陽>顕彰碑 高さ7mもある巨石)

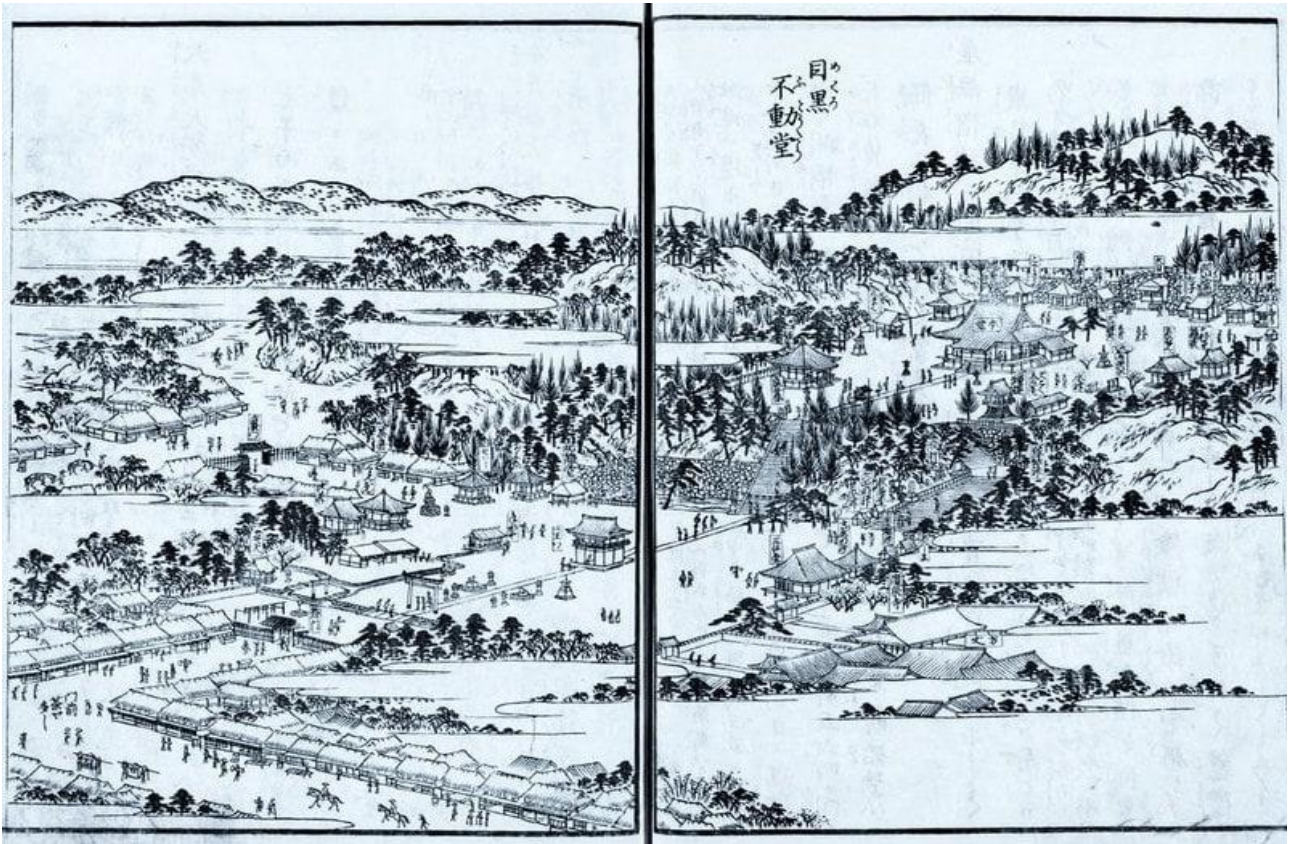


(北一輝 顕彰碑)



目黒不動尊は往時から衆生の信仰が篤く、縁日には門前に市が立つ盛況だったそうなの。江戸名所図会にも門前の市が賑わっている様子が描かれている。序のことに、「江戸自慢三十六興」という浮世絵に描かれている同寺の情景を3枚ほど引用しておくので、往時の江戸三十三観音霊場結願札所・龍泉寺（目黒不動）の様子をご覧頂いて満願とされたい。

（参拝日：令和7年1月29日）



（江戸名所図会「目黒不動堂」。門前町の賑わいも描かれている）



（浮世絵「江戸自慢三十六興」目黒不動堂の部、以下同）



(独鈷の瀧で水垢離を取る不動行者)



(名の有る花魁のお参りか?)

【番外】海雲寺



この札所は第 31 番札所「品川寺」のすぐ並びの旧東海道に面した場所にあった。一般的に観音霊場三十三札所巡礼なる巡礼路には番外札所という札所が付加設定されている場合もあって、なぜ「番外」として設定されているのかという縁起もちゃんと説明されているのが普通であるが（例えば「西国観音霊場」番外 2 札所など）、江戸三十三観音霊場番外札所たるこの寺の縁起は種々調べてみたのであるが寡聞にして分からなかった。もっとも、正規の 33 札所がどのような根拠で選択されているのかという由縁も怪しい札所もあるから、左様なことにいちいち云々する必要も無かろう。

さて、それは兎も角、この寺は観音様よりも千體荒神様の方が有名であるそうな。本堂よりも堂々に見える荒神堂には、大日如来、文殊菩薩、不動明王が垂迹した憤怒の相の千體三宝荒神王、並びに脇侍の飢渴神、障碍神、貪欲神（以上後註参照）が祀られているそうであるが残念ながら閉扉されていて拝観できなかった。

山門を入ってすぐ右側の祠には烏瑟婆摩明王（うすさまみょうおう）という世の中の穢れや悪事を焼き尽くす神様が祀ってあった。

また、境内に祀られていた平蔵地蔵と言う地蔵様には次頁のような縁起があったのだそうな。



（平蔵地蔵）



（烏瑟婆摩明王）

[平蔵地蔵 縁起]

江戸末期、鈴ヶ森処刑場で番人をしていた乞食の中に正直者がいた。この男が或る時大金を拾い、落とし主を探し出してこの大金を届けた。ところが、他の乞食仲間から、この拾った大金をネコババして乞食仲間ですれば乞食を廃業できたのにと、この乞食は乞食小屋から叩き出されて寒中の夜空の下で凍死した。これを耳にした落とし主（仙台藩士）はその亡骸を手厚く葬り、地蔵を建てて供養した。その地蔵尊が境内にあるこの地蔵だそう。今でも“檻樓は着てても心は錦”と参詣する人が絶えないらしい。

さて、この札所のご朱印の本尊の欄には「施無畏」と記帳されている。施無畏とは、菩薩が衆生の恐れ的心を取り去って救うことを意味する仏語であり、観世音菩薩の異称でもある。ご朱印帳の一般的な記帳では、この札所の本尊である「十一面観世音菩薩」等と記帳されるところであろうが、この寺では「施無畏」と記帳しているところがニクイ。

さはさりながら、奉拝年月日以外は筆記に替えて全てスタンプ印となっているのは風情が無いし、有難味に欠ける。
(参拝日：令和7年1月24日)

ついでに追記。

冒頭に掲げた山門の扁額の文字は、彫刻が歳月を経ている為か鮮明ではなかったが、当寺の寺号である「海雲寺」と読める。小生のような素人でも能筆の手に依るものであらうと思われるほどの達筆であった。



(山門の扁額 「海雲寺」)

[後註]

飢渴神：飢えを救い衣食住が不足しないように守る神。

障碍神：一切の障りを取り除き愛嬌を授ける神。

食欲神：不正の財を貪る者を罰し、正直者には福德を与える神。

いずれの神も自分に付けられた神名の状態を払う働きをする神であることに注意されたい。

~~~~~

以上で「江戸観音霊場三十三所巡礼」は満願となりました。

拙駄文に最後までお付き合い頂き、誠にありがとうございました。

祈 三界萬霊 六道平安 合掌

~~~~~



(棟方志功画伯 謹寫 「二河白道図」)

【日程別 参拝札所一覧】

	参拝日	参 拝 札 所 (①・・・=札所番付番号)
1	2024/10/31	① 浅草寺⇒②清水寺⇒⑥清水観音堂⇒⑦心城院 4札所
2	11/16	③ 大観音寺⇒④回向院⇒⑤大安楽寺 3札所
3	11/18	⑨定泉寺⇒⑧清林寺⇒23 大圓寺⇒⑩浄心寺⇒⑪円乗寺⇒⑫伝通院
4	12/06	⑬護国寺⇒⑭金乗院⇒⑮放生寺⇒⑯安養寺⇒⑰真成院 5札所
5	2025/01/16	⑱宝福寺⇒⑲東圓寺⇒24 梅窓院 3札所
6	01/24	32 観音寺⇒22 長谷寺⇒29 高野山東京別院⇒30 一心寺⇒31 品川寺 ⇒番外・海雲寺 以上6札所
7	01/29	33 瀧泉寺 1札所
8	02/06	27 道往寺⇒25 魚籃寺⇒26 済海寺⇒21 増上寺⇒28 金地院⇒20 天徳寺 以上6札所 満願